

Klaus ♥ Steven

Bitter?
or
Sugar?

R18



何度も
想像した
事がある



自分の手で
乱して
キスをする



どんなに激しい
戦闘をしたって
乱れることの無い
その髪を



所詮は妄想だ

現実じゃ
ない

現実じゃない
ハズだ



これは

現実には
起こり得ない
こんな：



このタイを
解いても？

なんだ？

— 数時間前 —







なんて



仕事中に
考えることも
増えたなあ



よし！
撤収！

……
良いだろ
別に



頭の中は
自由だ



旦那さん
スカーフ入んぞ
一から終わり
まじでせー





OK













君の
気の
せいだ



…君が

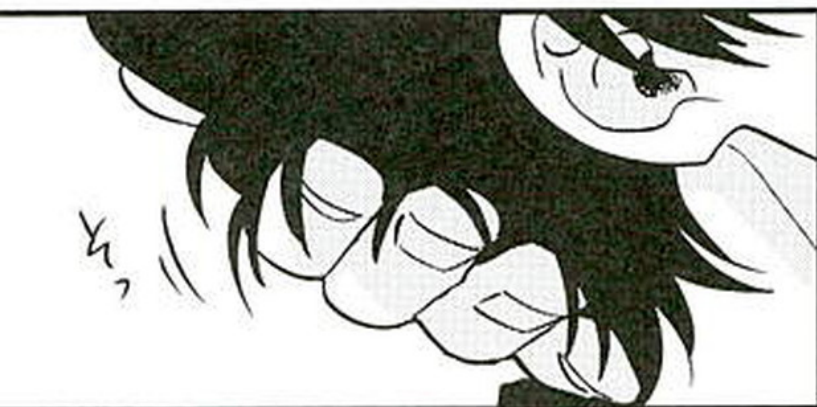


長年の
私の側
に居て
私を理
解して
くれて
いるよ

私も同
じ君の
側を過
ごし

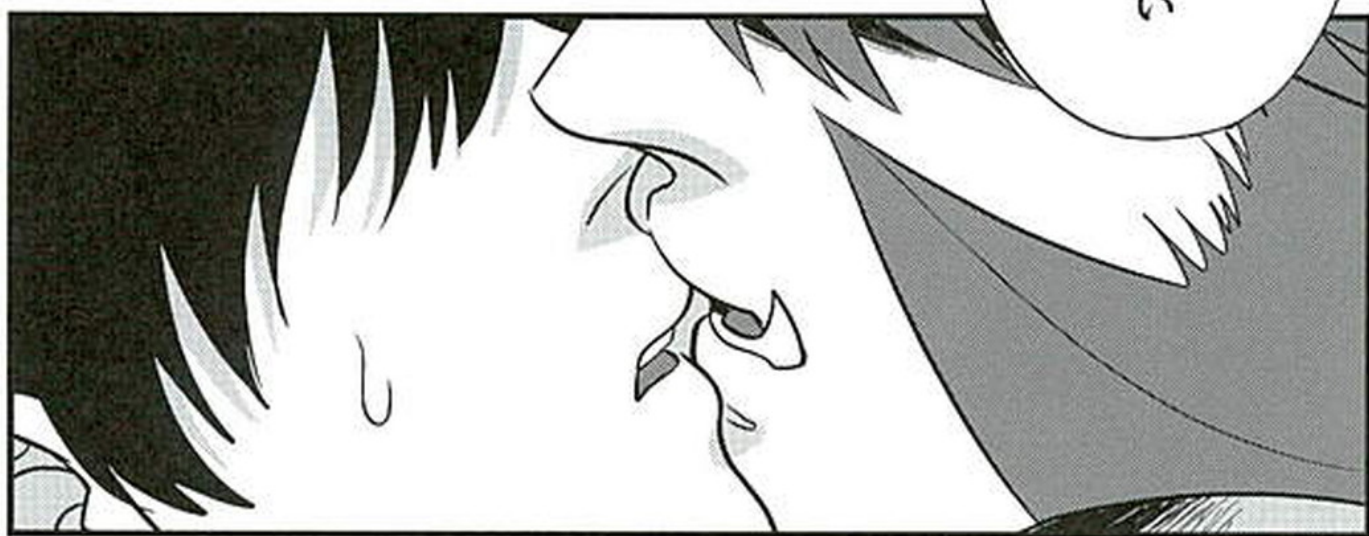


君を見
たのだ

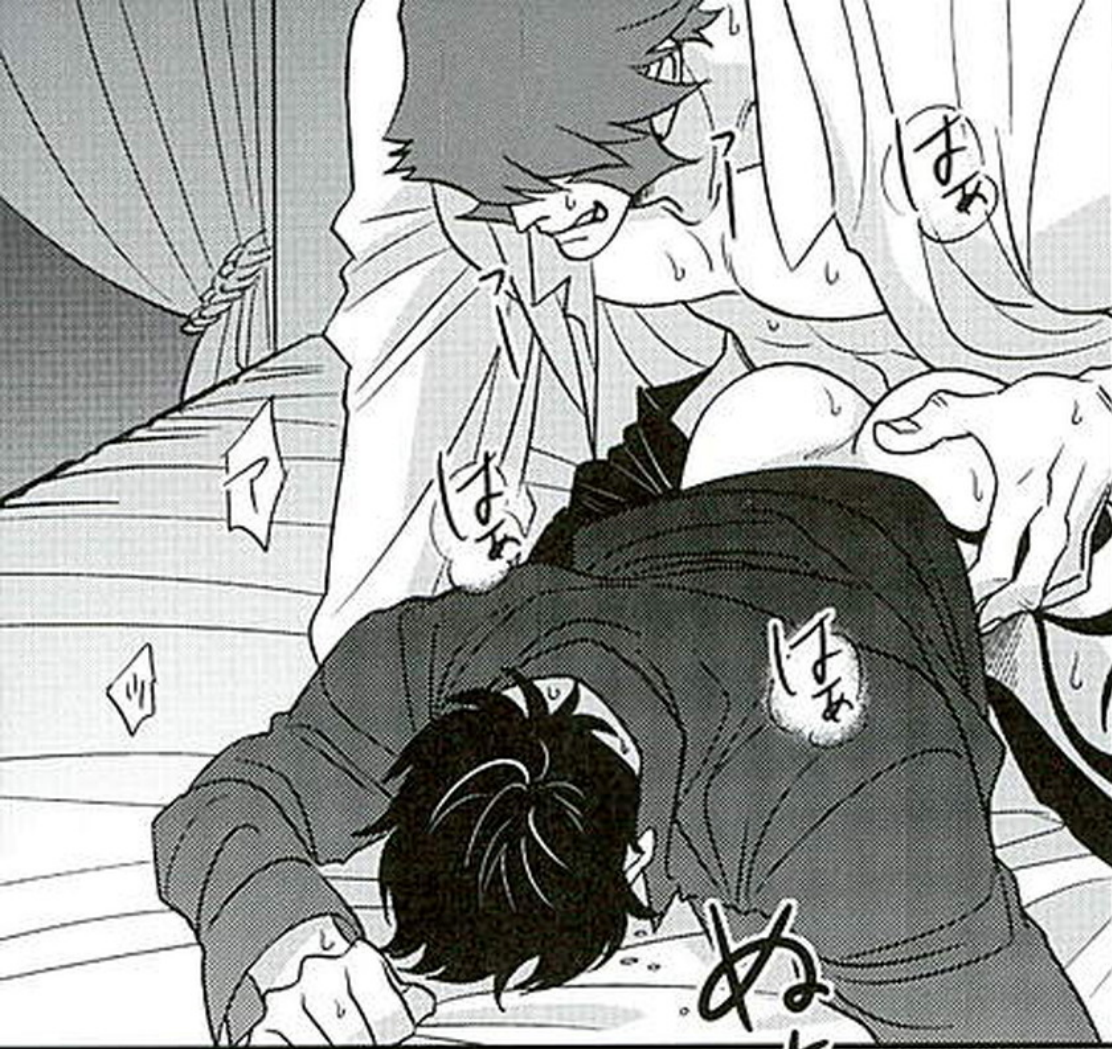


確信を得た
クラウスは

ステイブ
ン



容赦が
無いんだった……



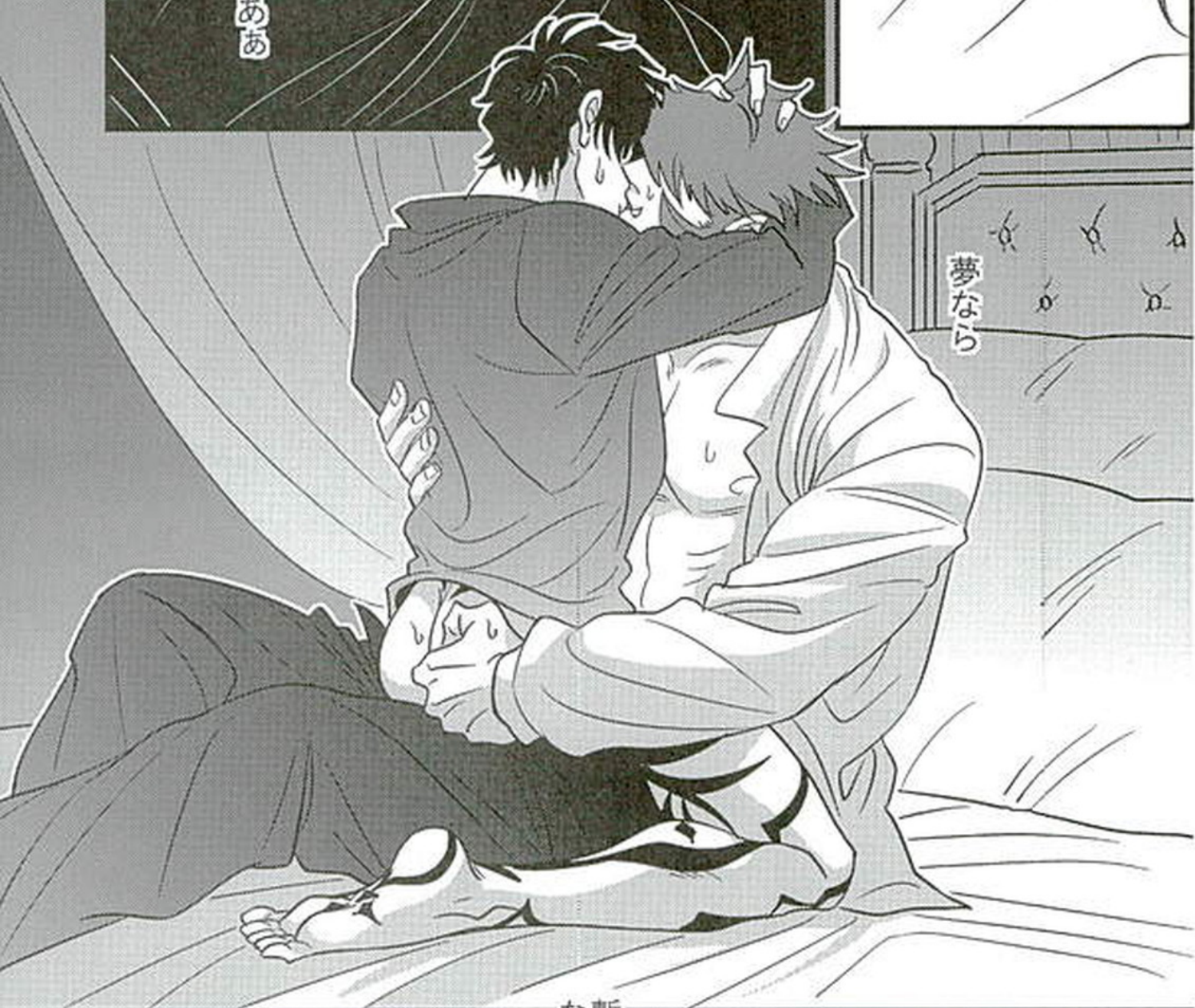
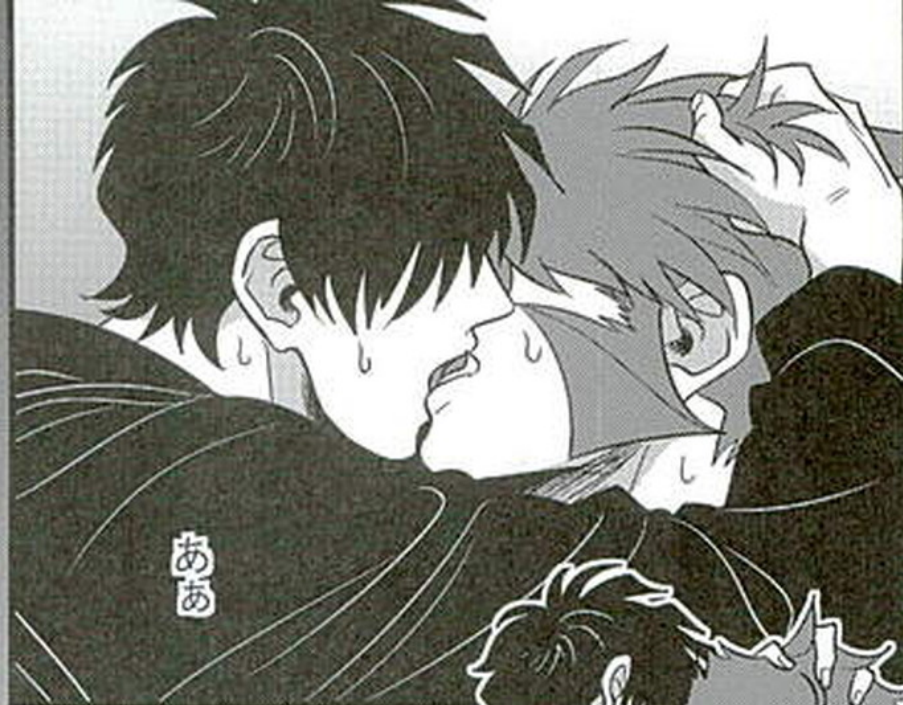




君を

クラウス





暫く覚め
ないでくれ

ああ

その件に
関しては

私から
ステイプンに
伝えよう

うむ

では
また後程



すまない
クラウス!
寝すぎた!

今
支度

ガッ

を...







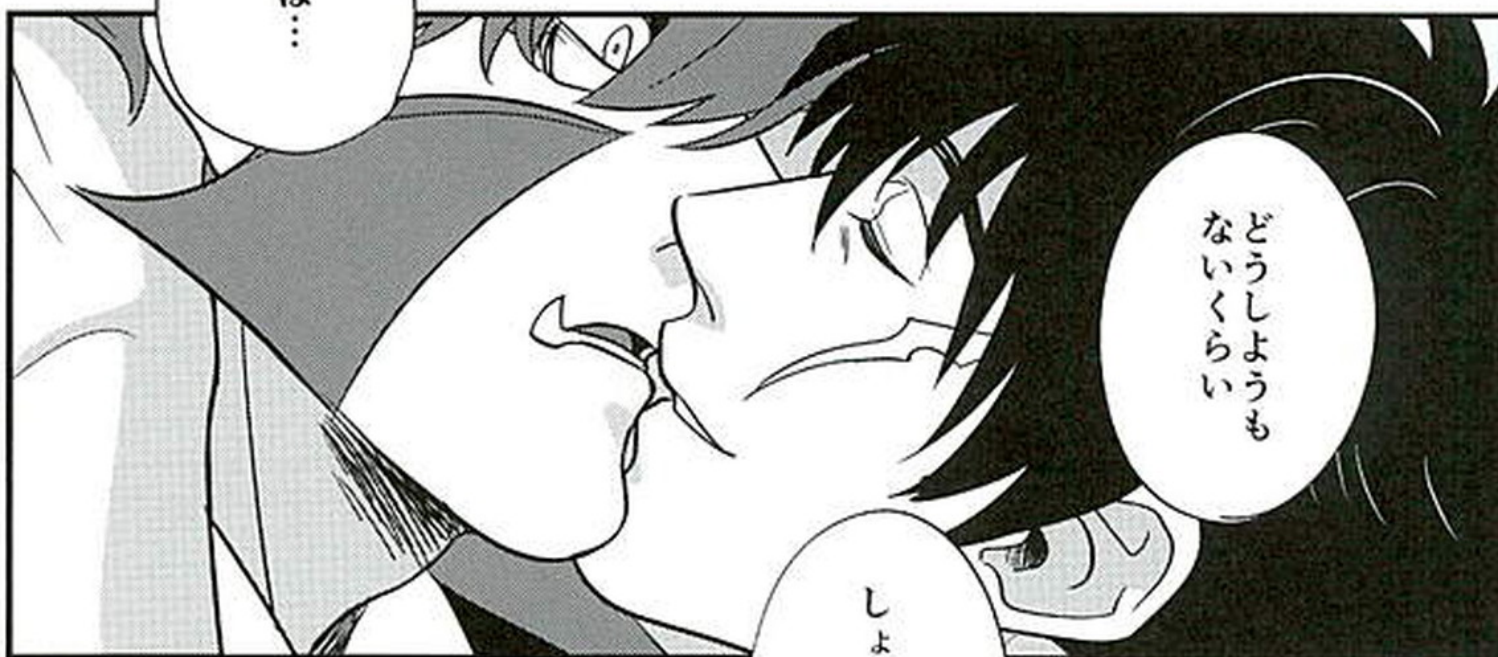




俺は…



君らしいなあ



どうしようも
ないくらい

しょっちゅう

考えてたよ



ああここか




クラウドス!




君、怪我は…




ああ…




君はまた、一人で背負うんだな




クラウド



あっちも片付いた
終了だ




…お疲れ




ステイブ
君の方は…




問題ない



撤収だ
キャンプまで戻れば
君は迎えが来てるだろ？



降ってきた



取り敢えずどこか
しのげる所に…っ



まったく惜げない事に、横に並んで一緒に泥水にまみれることくらいしか



俺には…してやれることがない









な…!
うわっ!?



ん?



何…

ステイブーン!



すまない!
丁度スプリンクラーの
作動時間だったのだ

うっかりしていた
早くシャワーを…

クラウス

風邪を引いては!







クラーウス




大丈夫だ



慌てすぎだ
俺はレディじゃないんだぞ




牙狩り時代は
いつもこんなだったろ
泥だらけの汗まみれ



…しかし



頭から水被ろうが
どうって事ない



ジャングルで
野宿だって日常茶飯事で



セックスだったした



あはは
悪い悪い
水被ったらなんだか
懐かしくなっちゃってね



…からかわないで
くれ給え





…なんだい？





君も、懐かしくなった？

…当時の私は

自らの腕の長さが
足りない事に歯噛みし
事あるごとに懊惱するような



そんな未熟さを
君にぶつけていたのだ

そして何より

任務が明ければ
君との別れがあった

次にいつ会えるのか
また君と
バディが組めるのか

…今思い返しても
恥じ入るほどに

君との別れが
辛かったのだ

ステイプン



呆れる…ね

呆れられても
致し方ない



確かに



ステイ…



…



俺と離れるのが
辛かった？



…うむ



もうバディが
組めないかもと
不安だった？



うむ

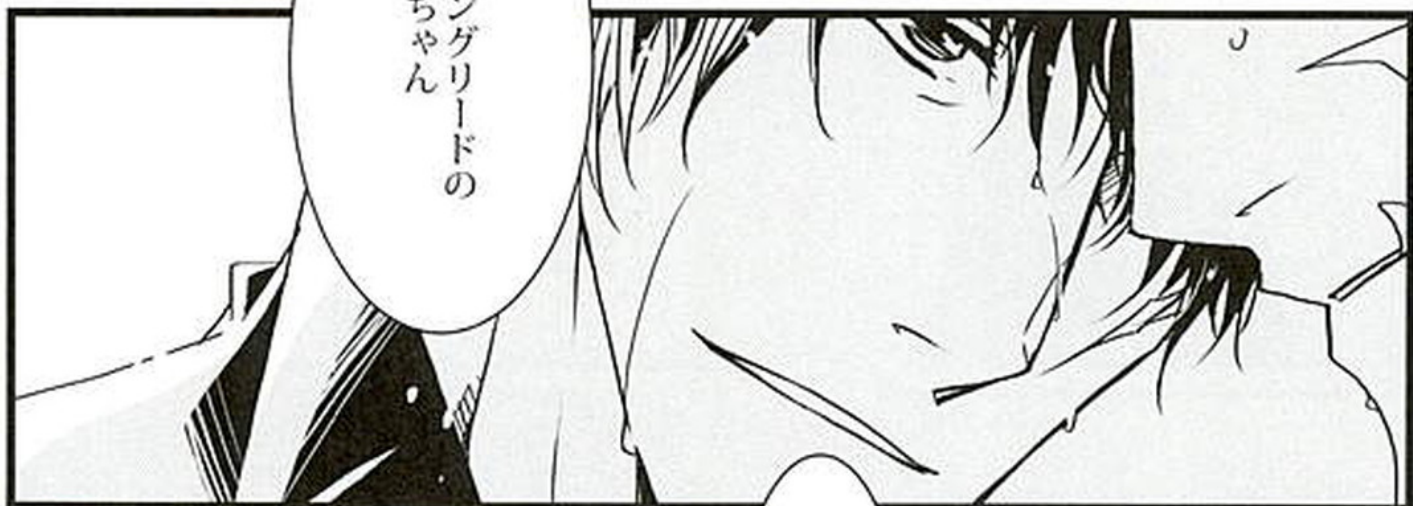


俺の方が
百倍不安だったぞ

ブレンダリードの
お坊ちゃん



…そんなの



…ステイブン



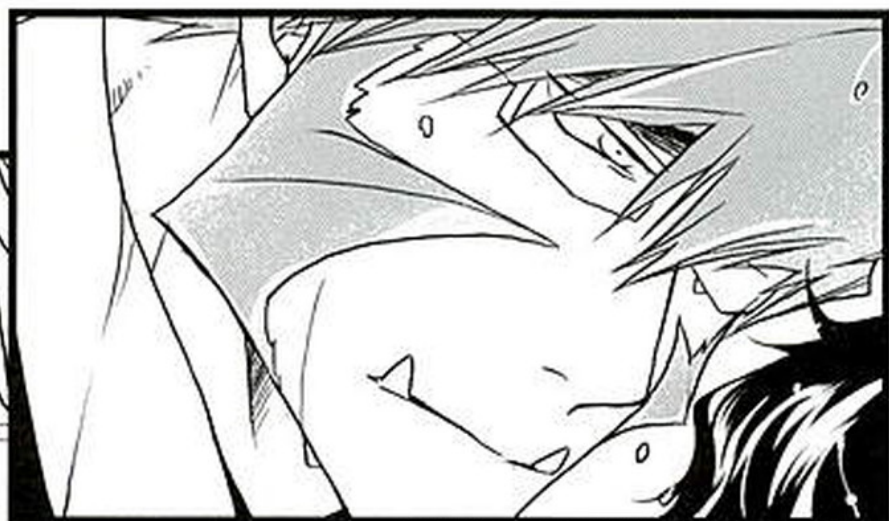
こんな事を
言うべきでは
ないのかもしれないが

どれ程の
混乱の中だとしても
私はこのHLで

今、君と
共に在れる事を

幸福に思う

…すぐシャワーも
浴びられるし？



そうだとも
ステイブ
ン



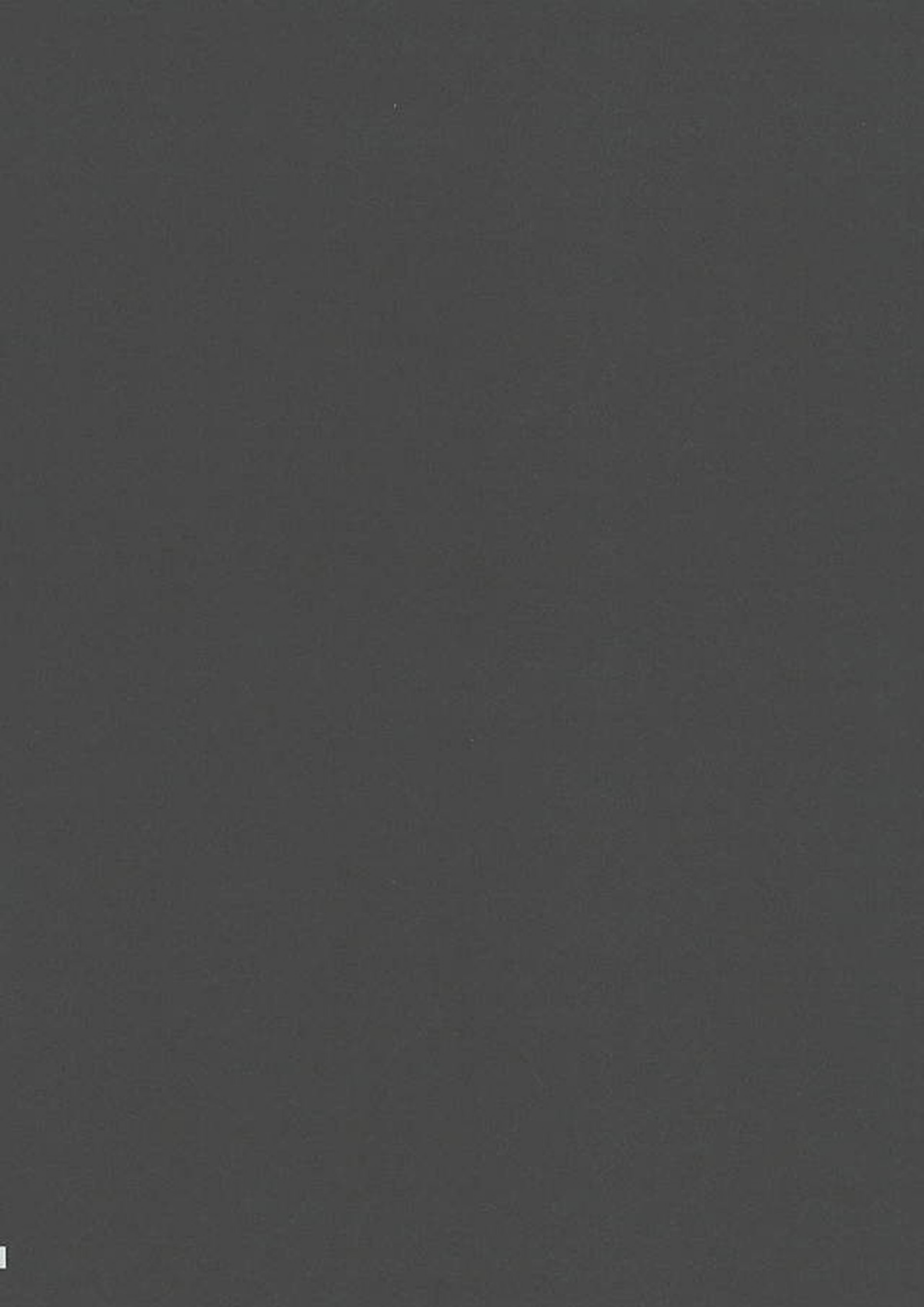
風邪を引かずに
すむのだ

For thee against myself I'll vow debate,
For I must ne'er love him whom thou dost hate.

Shakespeare/SONNET LXXXIX



**Next
Special Guest**





A Frozen World Unknown

ポジ



いつも世界は分厚い氷の向こう側に見える。

部屋の反対側の灯りが消える。顔を上げるとレオナルドがメツセンジャーバッグ片手にこちらを見ていた。

「あの、そろそろ僕、帰ります」

「ん？ もうそんな時間か」

腕時計を見ると、そんな時間も何も無かった。通常の勤務時間はとうに終わっている。おやと眉を上げた時、デスクの片隅に報告レポートが差し出された。

「遅くなってすみません」

「ああ、これか。さっきから散々ザップに邪魔されてたのは」

よほど都合の悪い事でもあったのか、昼間から報告書を作るレオナルドに手を出し口を出していた男の顔を思い出し、ステイブンは乾いた笑いを漏らした。今更一つや二つの報告書を取り繕った所で、素行の悪さの誤魔化しに役立つとは到底思えない。

「ほんと、ろくな人じゃないですよ。悪い人じゃないけど」

「君は優しいなあ」

「いえ、でも五、六回死なないかな、とは思ってますから」

「はははと半分本気のみで笑った少年が、小首を傾げる。」

「まだ帰らないんですか？ この時間までいるの、珍しいですね」

「まあなあ。俺も出来れば残業なんて御免こうむりたいんだが」

「そう言いながら、パソコンの液晶に目を走らせる。待っている連絡は、未だに來ない。それでも時間を忘れていた分、待ち時間

は随分短くなっていた。

「時差つてもんはここでも有効だからなあ。あと一時間で来る筈の連絡を待たないと、うちの資金繰りがな」

「あ、スポンサーさんの……」

「そうそう。見込みが大幅に違ったら、事業計画を見直さなくちゃいけない」

早く向こうの会議が終わってくれないもんかねえと画面をつつきながら、ステイブンはデスク前のレオナルドに笑って見せる。

「まあそう言う訳だから、今日は暫く居残りだ。気にせず先に帰って良いぞ」

「解りました」

それじゃあ、と頭を下げてデスク前を離れ、退出しようとドアを半分開いた所でレオナルドが動きを止めた。振り返り、尋ねる。

「あの、こっちの灯り点けておいた方が良いですか？」

そう言いながら灯りの消えてしまっている方を指さす彼に、ステイブンは目を丸くした。

「いや、どうせ俺一人だしなあ。大丈夫だが……どうしてだ？」

優しい少年の心づかいがどこにあるのかが解らず、ステイブンは首を傾げながら尋ねると、レオナルドは慌てたように顔を赤くする。あ、そうですよ、ですよ！と焦ったように手を振る様子は、実年齢より彼を随分幼く見せた。

「俺、前に部屋追い出された時、ここに間借りさせて貰ってたじやないですか」

「ああ、あつたな、そんな事も」

懐かしいなあと思っていると、レオナルドが恥ずかしそうに頭を掻く。

「ここで寝るのって、何か凄く寂しかったんですよ。昼間は皆がいて賑やかで明るいのに、誰もいなくなったら静かで凄く部屋が広く感じちゃって」

真つ暗な中に飲み込まれそうなくらい、と言って、レオナルドが灯りの消えた側に目をやるのに釣られ、ステイブンもそちらへ顔を向けた。

空のデスク。誰も座っていないソファ。向こう側に開しか広がっていない窓。

がらんとした、空虚な景色はどこか見た覚えのある、デジャヴユを感じさせた。

自分は、よくこれを見ている。

胸中に浮かんだ何かを確かめるよりも前に、ステイブンの意識を声で遮った。

「でも、ステイブンさんがそんな風になんて、思う訳ないですよね！ やだな、俺、恥ずかしい事言ったなあ」

今の、内緒にして下さいねとレオナルドが照れくさそうに笑う。それに笑って頷きながら、ステイブンはそこそこにあるデジャヴユの輪郭を捕らえた。

自分がいつもいる所にそれはとてもよく似ている。

誰もいない、虚無に満ちた空間。厚い氷越しに見える世界。氷に乱反射して目を刺す光。

少年の言う、寂しいと言う気持ちには一体どんなものだったろう。笑顔を貼り付けたままのステイブンは、ドアを開けながらレオナルドが言う。

「あ、じゃあ俺、これで帰りますけど、コーヒーか何か、もしいるなら……」

「レオナルド君。こんな遅くまでどうしたのだ」

突然、中途半端に開いていたドアから、背を曲げながら男が入ってきた。それを認めた瞬間、ステイブンは目の奥に微かな痛みが走ったような錯覚に襲われる。

部屋を満たす光量は、変わっていない。

「ちよつと報告書を作るのに、手間取っちゃって……。あ、でももう帰ります」

「そうか。外はもうだいぶ暗い。気を付けて」

「クラウス。少年に言う前に、君は一体何で来たんだ」

お疲れ様でしたと頭を下げるレオナルドを、ドアを押さえて送り出した後、部屋に踏み込んできたクラウスに、ステイブンは呆れ声で言った。

「今日は国の御家族と食事じゃなかったのかい。スカイポ越しの」

「勿論、それは済ませてきた」

そう言いながら、クラウスは持っていた紙袋からタンブラーを取り出し、ステイブンのデスクに置いた。少しだけそれを見詰めた後、手に取る。タンブラーの中でたつぷりと入った液体が揺れる感触が微かに伝わってきた。

「ギルベルトさんお手製かな？」

「コーヒーの大量摂取は胃に良くないだろう」

飲み口の蓋を開けると、中から湯気と共にふわりとミルクと茶葉の混じり合った香りが立つ。三十路男にミルクティーかと、ステイブンは苦笑いを漏らした。

「これはありがたく戴くけどな。どうしてまた戻ってきたんだ。君が仕事を残して帰る訳も無いし」

忘れ物と言う柄でもないだろうと、タンブラーに口を付けながら尋ねると、クラウスが自分のデスクの椅子に腰かけながら当たり前のように言う。

「君がまだいたからだ」

「……うちのボスは、職務規定を何だと思ってるのかねえ」

困ったもんだと眉を寄せて笑うと、クラウスは不思議そうに首を傾げた。その様子に表情を緩めながら、PCを突いて見せる。

「これは俺の仕事だ、クラウス。ボスの君が付き合う事じゃないだろう？」

「その表現は、正しくない」

ステイブンの言葉を、クラウスが手を上げて制した。

「私はボスとしてここに来た訳ではないのだ、ステイブン」

クラウスはいつでも目を合わせながら言葉を紡ぐ。乱反射する目を睨めた所で、きつと笑った様にしか見えないだろう。その術をステイブンは、もうだいぶ前から会得していた。

「何だ、部下を気遣う優しいボスって訳じゃあないのか」

からかうような口調で言うと、クラウスが少しだけ困った顔をする。その困り顔に笑い、ステイブンは手を振って否定してや

った。

「クラウド、本気に取るなよ。俺は君にそんなもの、求めてないさ」

本音だった。クラウドにそんなものを求めたことは、かつてただの一度も、ありはしなかった。安心したように笑みを浮かべるクラウドに、それで？と首を傾げて見せる。

「じゃあ、僕に退屈な時間を過ごさせない為に、話相手にでもなりにきてくれたのか？」

笑いながら、分厚い氷のこちら側、そこここにヒビが入っていないかを確認するような心持ちがする。何かを予感しているような、空気が違うような、そんな気がする。

ちりちりと炙られるような錯覚に、肌が少しだけ泡立った。

「ステイブーン」

「何だい？」

知らずに胸中で駄目だと呟く。何を止めたいのか、解らないのに解っていた。

彼の口を、閉ざさなくてはいけない。

パソコンの画面をちらりと見やる。待っている連絡はまだ来ない。今の空気を壊す手立てを、探す。タンブラーを持つ指が、微かに震えた。

自分は何かを、恐れている。

恐れている。恐れているのか？

クラウドの瞳の緑が光を弾く。宝玉のようなその色の奥で、何一つ譲らない強硬な意志が腰を据えている。

戦いの時に見えるような、燃える色であればまだ良かった。

「私は」

「待った」

何一つ手立てを持たないまま、ステイブーンはクラウドの言葉を遮った。何をしたいのだと、自分で自分に問う。

複雑な女心を擦り口説き、情報を抜き出し、恨みすら買わずに身を引く術を、自分は身に付けていたのではなかったか。それが今、目の前の男が何をしようとしているのかを、全く読めなくなっている。

何という無様な。

ステイブーンの何の目的も無いその制止を、クラウドはいっそ優雅にすら見える穏やかさで無視をした。

「想い人の近くに、いたいと思うのはおかしい事だろうか」

分厚く巨大な氷の壁が、大きく鈍くしむ音がした。

殴られたように激しい音を立てた心臓を、ステイブーンは深い呼吸で宥めようとする。体内を巡る熱を凍らせねばならないと、そう思った。

「……また随分と、君らしくないジョークを言うな」

笑いながら手にしていたタンブラーをデスクに置く。

言葉は震えなかっただろうか。

顔色は平静だろうか。

何もかも、普段通りに見えているだろうか。

眼鏡越しのクラウドの瞳を見返しながら、ステイブーンは笑顔を作った。

「誰にそんなもの仕込まれたんだ？　ギルベルトさん……って事は無いだろうな」

努めてからかうような口調で言う。そうであって欲しいと、心から願った。

けれど。

「ジョークのつもりは無い」

宣誓するかのような重々しきでクラウスが言った。

「君にとっては、迷惑な話だろうか」

真つ直ぐにこちらを見つめる目は、微かに申し訳ないと言いたげな色を浮かべていた。ほんの微かに。それだけだ。

彼の意志が揺らぐ事など、ある訳が無かった。

発する言葉を覆す事など、ある筈も無かった。

そつと分厚い氷の壁を確認しながら、ステイブンは困惑した表情に見える様に眉を寄せた。ほんの少しの驚きと、それからもう少し多めの動揺と。

強張ってしまった唇を動かし、言う。

「出来れば、聞かなかった事にしたいところだ」

「……………」

なるほどと呟きながら、クラウスが両手を組んだ。その目は逸らされない。色も変わらない。彼に動揺は見えない。

プロスフェアーを打つ時の様だと微かに思った瞬間、背筋を震えが駆け抜けた。

自分は、何手先まで読まれている？

心臓の裏側が冷えていく。

「聞かなかった事にはしないで貰いたい。何も無かった事にする気はないのだ」

「随分勝手な言い分だなあ」

苦笑いを浮かべているように見えるだろうか。

ぎしぎしと氷の壁が音を立てる。向こう側に少しずつ、熱量を感じて。

ステイブンはタンブラーに手を伸ばしながら、パソコンの画面を横目で見やった。救いの手に足りるかどうかも解らないメルは、未だに來ない。

ゆつくりとミルクティーを口に、長く息を吐き、吸う。体内の血液の温度が下がっていくのを感じる。両手でタンブラーを持ったまま、ステイブンは両膝の間にそれを投げ出した。

「俺はどうしたら良いのかな？」

片眉を上げ、笑って見せる。自分がこの顔を作れば、どう見えるかなど百も承知だった。

経験豊かで遊びに慣れた大人の男。それが年下をいなしているのだと、自分自身に言えれば良かった。

そして、果たしてそれはある程度、真実でもあった。

「俺達の友情を、このままここで終わらせてしまうのは、あんまりだと思っただよ。クラウス」

彼程の打ち手でなくとも、始まった勝負に諸手を上げて降参するほどプライドが低い訳では無い。自分が守ろうとしているものを、そう簡単に投げ出す気も無かった。

「友情を？」

「そう、友情を」

脳が冴えていく。

深い緑に浮かぶ、平静の色を見返す。

「君は、同性愛に偏見を抱くような人物ではないと私は信じている」

「自分に向けられれば話は別になると言うのは、往々にしてよくある話さ」

しん、と空気が冷えていく。プロスフェアの駒を操る一手が見える。

ステイブンは微かに目を細め、その一手の着地点を探った。それを捕らえ、そのままその場に氷の槍で縫い付ける。

あらゆる可能性が脳裏で巡った。最も汚い手段も、最も冷たい手段も、全てを自分は打つ用意がある。それを自分は知っている。

例え相手が誰であろうと。

例えそれが、クラウス・V・ラインヘルツであろうとも。

「君が私を軽蔑しても、それでも構わない。私達の友情の形が変わろうとも、私はそれを受け入れよう」

「……なるほど」

そんな事を言いながら。

ステイブンはほんの少しだけ、苦笑いを浮かべた。

そんな事を言いながら、欠片もそんな事が起きると思っていないんだらうと、目の前に座る男を見る。

頑強で、強固な意志を持ち、偽る事も曲げる事も知らない。

「……本当に」

本当に困った子供だ。まっすぐに曲がる事も偽る事も知らず、頑固で、残酷な。

身を起こし、ステイブンは背凭れに体を投げた。それなりに経費をかけた椅子は、物音一つ立てずに長身を受け止めてくれる。そのままゆらりと両手と足を組んだ。

「俺はね、クラウス。親友として君を尊敬している。ボスとして敬愛もしている」

「君からの賛美の言葉を、光榮に思う」
こちらを見ている目が嬉しそうに細くなる。そんな顔をするなよと、ステイブンな内心で呟いた。

君は本当に、人の負の部分に簡単に打ち捨てる男だ。

「さっきの君の言葉を無かった事にすれば、俺の中のこの気持ちは守れる。君の一存で、俺の気持ちを換えようとするのは、些か傲慢じゃないか」

酷い言いようだと思いつつ、ステイブンは微笑んで見せる。事実それも本心だった。

その言葉に、クラウスの目から笑みは消え、代わりに困惑に似た色が浮かんだ。

「ステイブン」

「なんだい？」

クラウスが己の膝に肘をつき指を組む。多少前屈みになったところで、彼の視線が上から降ってくるのは変わらなかった。

「私はそれも、了承しているのだ。君に告げようと決めた時から」

その程度の覚悟すら、していない男と思われたのだろうか、

クラウドの眉が少しだけ下がる。じわりと冷たい汗が背筋を伝った気がした。読みが甘かったらしいと、内心舌打ちをする。

思っていた以上に、彼は捨て身だ。

「君に軽蔑されても構わないと言った筈だ。ただの無害な友人だと思われ続けている位ならば、いっそ君の軽蔑が欲しい」

「……恐れ入ったね。君にそうまで言わせるなんて、俺も大したものだ」

苦笑いして見せながら、ステイブンは頬を掻いた。

それでも体内は冷たく凍る。自分は冷静なのだと、少し安堵する。そのままステイブンは、己を真つ直ぐ見ているクラウドを見、苦笑いを顔に貼り付けたまま頭の片隅で考えた。

彼は引かないだろう。その行動は、ここまで覚悟を決めた彼の中に選択肢としてある訳が無い。拒絶するか、受け入れるか。二つに一つしか彼は認めないだろう。

変えたいのだと、彼は言った。自分が拒絶しても構わないと。だが、果たして自分がそう出来ると彼は思っているのだろうか。そして自分は。

長く息を吐く。溜息にも聞こえるだろう。

ぐしゃりと前髪を掻きあげる。

「君は、ここで俺が君を拒絶しても、明日からのライブラは変わらないと信じているんだな」

「勿論だ」

「君らしい」

考える。どうすれば良いのか。自分が作り上げてきたこの世界

を、どうやったら守っていけるのか。

「……どうして俺なんだかな」

「理由など、無意味だ」

「正論ばかり言うなよ」

小さく笑うと、クラウドの雰囲気は幾分か和らぐのを感じた。そうか、君も緊張はしていたんだなと微かに思う。

「結論から言うと、俺は君には応えられない。かと言って、君を軽蔑するのも無理な話だ」

どうせ君にはわかっていたんだろうと皮肉めいた口調で言っても、クラウドは生真面目に一つ頷くだけだった。

君は本当に困った奴だと、内心で呟く。

そうやって俺の取るであろう道を最初から全て塞いで塞いで、君は一体何を得たいんだ。

君が今望んでいる答えを、俺は一生君に渡すつもりなど無いのに。

クラウドの頭上に在る天井を眺めながら、ステイブンは確かめた。己の周りには氷の壁の頑強さを、厚さを、その冷たさを。

これから取る手段は、一番残酷な方法なのだと思う。ただ、それを彼も承知しているのだとも思う。その中で、彼は勝ち取ろうとしている。自分からの本当の答えを。

笑いが漏れた。

何てこった、クラウド。滑稽じゃないか。ヘルサレムズ・ロットを、世界を守る為に戦いながら、自分達はお互いを相手に、神経をすり減らすだけで、何を得られるのかも解らない勝負を始め

ようとしている。

「クラウス」

笑いながら、肘かけに突いた手に首を傾けて頭を預ける。傾いた視界の中、クラウスの気配が揺れる。

「ここで君を拒絶して、明日から普通に振る舞ってみせる君を見ると言うのも、良い気分にはならないだろうな。どう思う？」

「君は、友情に厚い男だ」

「買い被ってくれるね」

ひらひらと手を振りながら、ステイブンは生真面目に自分の答えを待つクラウスを見た。

「俺は、そういう微妙な状態は面倒で好きじゃないだけだ」

そう言っただけで立ち上がる。ようやくクラウスと見交わす視線が平らになる。

「そうなる、俺は君相手に仕事と同じ事をする以外無いのかね」
「……………」

クラウスの目が軽く見開いた。その後、彼の顔に浮かんだ表情を何と称すればいいのか解らない。

笑みを堪えているような、鬨気を抑え込んでいるような、それでも内側から何か漏れているような。そんな表情だった。

解るだろう、と目を細める。

つまり、彼の始めたプロスフェアーよりも複雑で単純なこの勝負は、次の展開に移ったと言う事だ。

「それは、私にとって福音だ」

「ビジネスと同じでもか」

有り得る筈が無かった。彼がそれで満ちるくらいなら、最初から口火は切らないだろう。

解り切っているくせにと自嘲しながら、ステイブンはクラウスが腰かけているチェアーの肘掛に手をついた。ふわりと鼻先を彼の香りが掠める。

間近にある赤茶色の髪。曇り一つないリムレスの眼鏡。その向こう側にある、強固な意志を湛えた緑玉。

どれもこれも、こんな距離にあった事は無かった。少なくとも、こんな意味では。

「早く君が、愛想を尽かしてくれる事を祈るよ」

「…………それは是非、諦めて欲しい」

声はもう囁きだった。その気になれば己の首など容易にへし折れるその手が、おもむろに頬に触れる。その体温が熱い。

目をゆっくりと閉じながら、ステイブンは自分を包む氷の壁を、もう一度そつと固め直した。

例えば誰かの特別になど、なりたくないんだ。

特別な人がいても、特別な位置に置きたくないんだ。

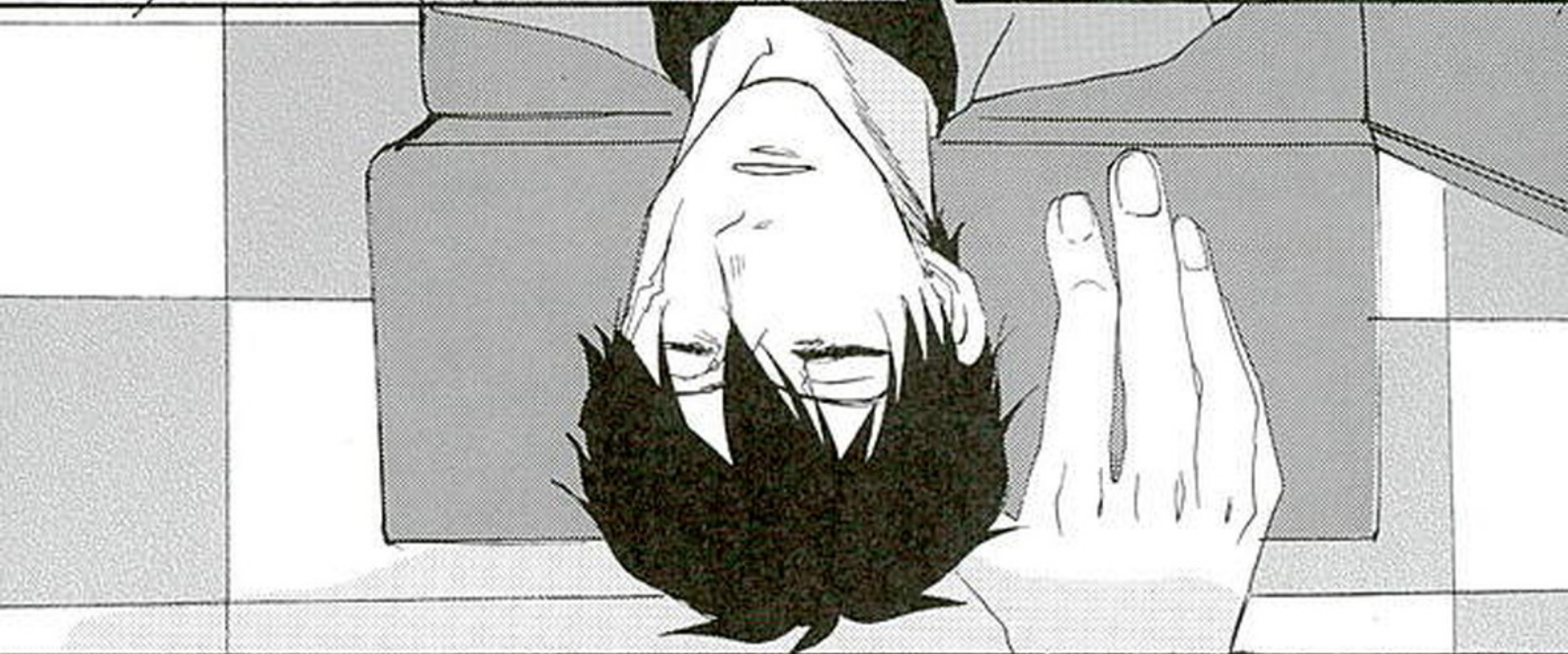
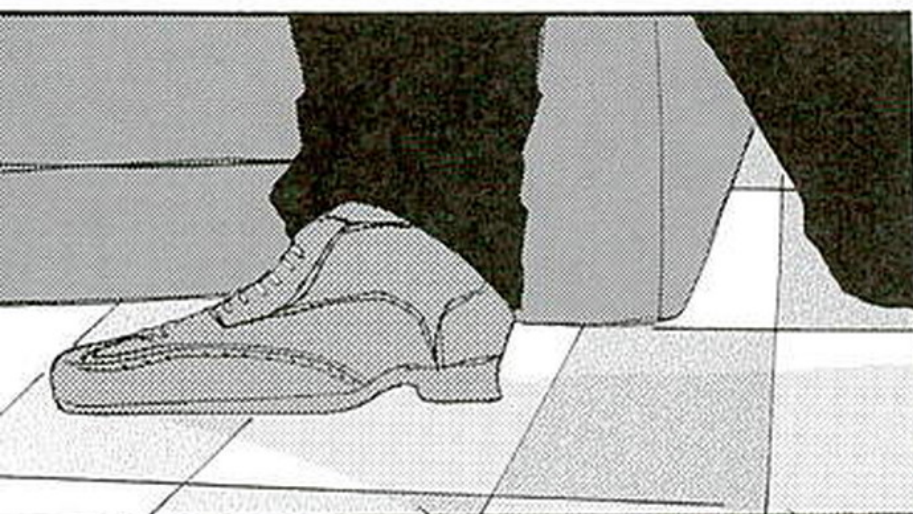
俺はこの、氷に閉ざされた世界が好きだ。

だからクラウス。君の抱える数多くの大切な物の中に、俺なんか加えちゃいけないよ。



please.please.me メグロ正宗







っ起きていたのか...

アッ、アッ、アッ

アッ、アッ、アッ







いつも朝目覚めると
私の隣には居ないだろうか？

セックスした日の
朝のことかな・・・

ああ

でもそれは
僕の方が先に目が
覚めてしまうから
仕方がないだろうか？



・・・寝ている姿を
見せてくれるのは、
心を許している
証拠だと・・・

聞いたのだ



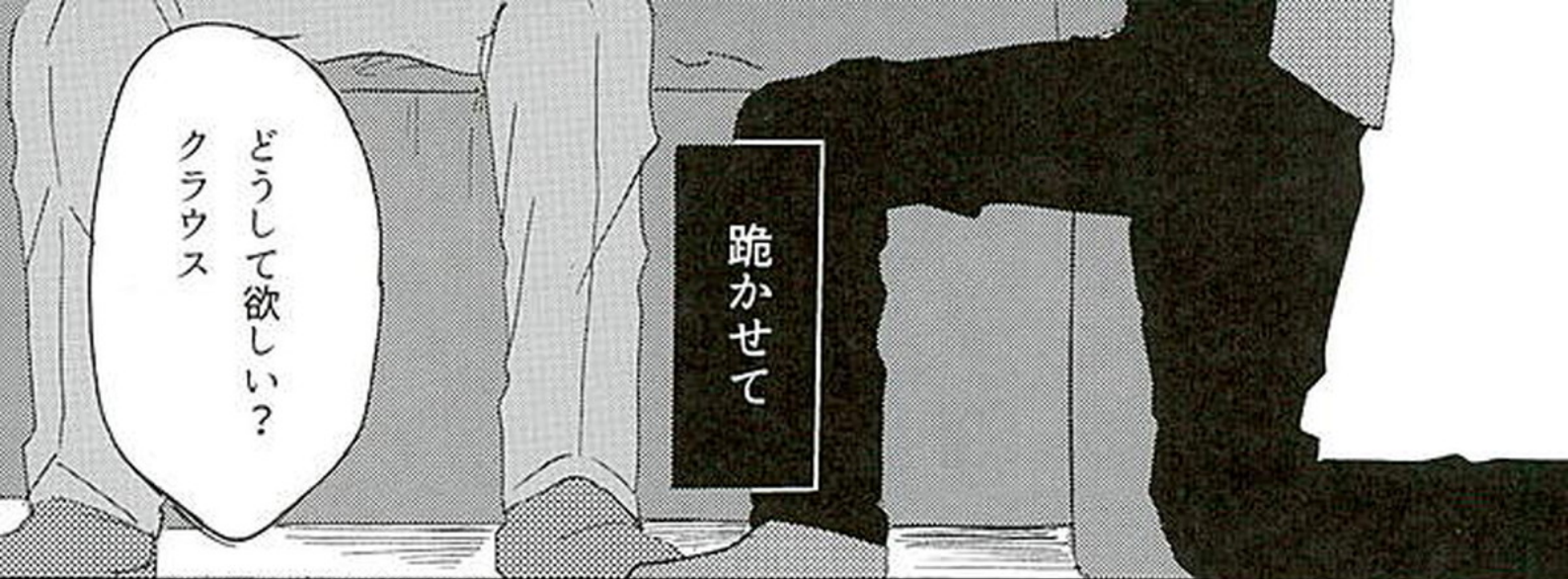
っ？誰だ？そんなく
だらしない事をクラウスに
吹き込んだ奴は・・・

アイツしか
いないな

で、

今僕が
珍しく君の前で
寝ていると思って





跪かせて

どうして欲しい？
クラウス



願いをきくなんて



別に
君に気を許してい
訳じゃないんだけ



神にでも
なった気分だな

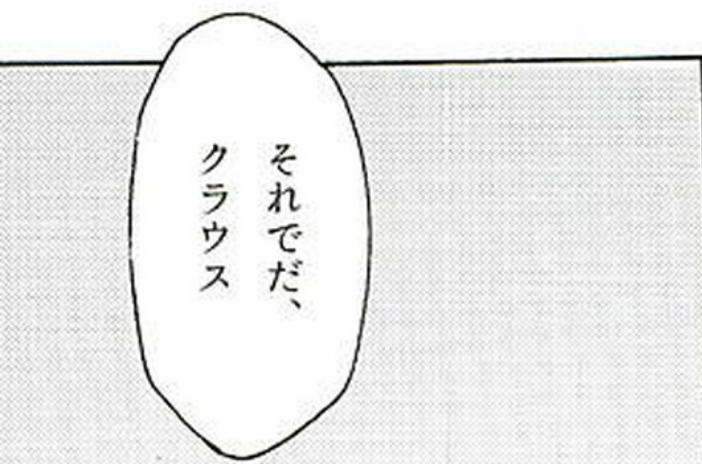


僕にしか
叶えられない願いだ
仕方ない！



早起き頑張ってくれよ？
ふふっ

フス
フス

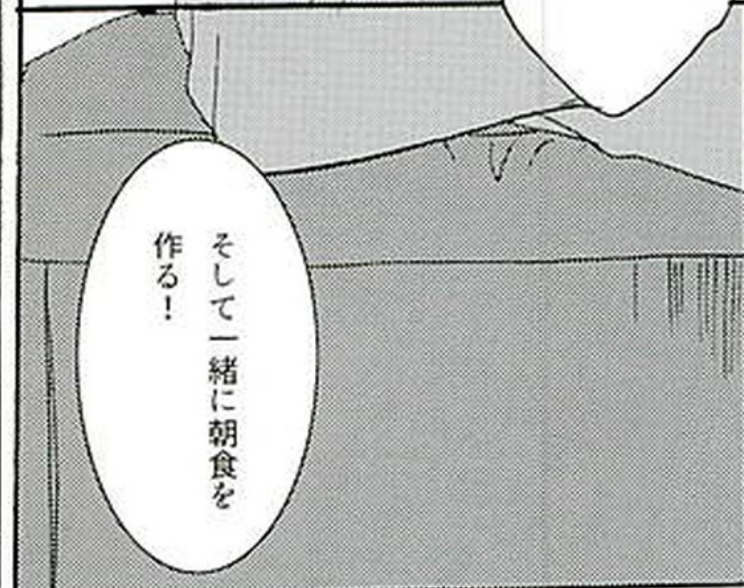


それでだ、
クラウス



じゃあさ

これからは
君が先に起きて
僕を起こしてくれ



そして一緒に朝食を
作る！



素晴らしい！

それは是非！
お願いしたい！



・・・もう一度

もう一度、今ここで
キスを・・・ステイブン



嬉しいお願いだな





逃避行

フユウ



——嗚呼。繰り返されるのは、延々と続く暗澹たる日常。謳うように、彼は口にした。

——ただ生きていくだけだというのに。決して安らぐことはないのだろう。

——それでも、霧煙るこの街で生きていくことに、幸福を見出していたのも事実だ。

彼は、恋い焦がれる少女のようにその瞳を輝かせていた。同時に、追憶に耽るかのように、その瞳を濁らせていた。

——太陽の光すら満足に届かない、血生臭い異界都市。
——ヘルサレムズ・ロッド。

凜とした声に名を呼ばれた。
その街は、きっとそれが嬉しかったのだろう。

絶望と慟哭。喧騒の中でも、彼が立つその場所だけは、おぞましいほどの静寂に満ちていた。

彼は街に別れの言葉を告げた。
そうして彼は、動くことが出来ないでいるその男の手を取って、

恭しく口をつけたのだ。
その時だ。

何かが、崩壊していく音を聞いたのは。

「——例えこの世界がどんな地獄と化そうとも、俺には君さえいればいい」

「……」
眩い光が臉を透かして瞳へと差しこんでくる。

何かがおかしい、という気持ちとともに、ぼんやりと臉を開いてみれば、何らおかしいことはないのだと、強張った肉体の力を解く。

ベッドの上で、琥珀色の瞳が、真つ直ぐにこちらを見据えていた。

初めて出会った時から、その瞳は澄んだ色をしていたように思う。冷徹を湛えるその瞳の中には、一方で、燃えるような熱情が潜んでいる。

奥行のある彼の瞳は、きつと彼の心、そのものだ。

彼の心に迫りつくには、何重にも張り巡らされた扉をこの手で開け放つていかなければならない。

「……夢を見ていたようだ」

覚醒したばかりで、声が掠れていた。ステイブンは瞳を細めた後、いつものように、口元を歪めた。

「へえ。君が見る夢か、気になるな」

ギシリと、ベッドスプリングが音を立てる。あたたかい肉体の熱が消えていく。裸体を惜し気もなく晒しながら、ステイブンは腕の中から擦り抜けていった。

「今日は、どうする？」

いつもの会話だ。

音を立てて、カーテンが開かれる。真白い朝日の差し込む寝室で、瞳に感じる強い光を臉で防ぎながら、今日の予定を思い浮かべてみる。

「君を抱く」

「……。それは、数時間前に済ませたことじゃなかったか？」
クラウスと、ステイブンは呆れたように眉を寄せた。咎める時の口調で名を呼んで、彼はまた、笑った。

ベッドから腰をあげると、彼は逃げることもなく、硝子扉の前で外を眺めていた。

燦々とした太陽に照らされた、一糸纏わぬ彼の裸体は美しい。しかし、外に人でも通れば丸見えだろう。早々に窓辺に近づき、細い身体を抱き寄せる。硝子扉の向こう側に人影はなく、安堵の息を吐く。あるのは白い浜辺と、砕ける白波だけだった。そんなこと、わかりきっていたはずだというのに。

ここはヘルサレムズ・ロッドから遠く離れた南国の島。小さな集落がぼつりぼつりとあるだけの、静寂に包まれた自然の楽園だ。島の人々は皆自分たちを歓迎し、広場に行けば時折言葉を交わすことはある。しかし、辺鄙な場所に立つこの小屋へと、彼らが立ち寄ることはなかった。

しばらく、青い海と誰もいない砂浜を眺めながら、太陽の光に身を焼かれていた。

目の前に広がるのは、あの街とはあまりにもかけ離れた景色。夢で見た景色が、酷く懐かしく思える。

「死ぬのは怖いかね？」

硝子に映る彼は、酷く驚いたような顔を作ってみせた。

「俺はとつくに、捨てたよ。そんな感情は」

「ふむ」

「……わかったよ。そうだな。もしかしたら、怖いのもしれない」

ステイブンは、自分の肉体を閉じ込める男の腕へと、その細長い指先で触れた。

「君と、離れてしまうことが」

するりと、皮膚の上を彼の爪の先が薄い痕を残していく。そうして指先が辿りついたのは、いつの間にか強く握り締めていた、男の無骨な太い拳の上だった。

「全部夢だったらいいと思つた。今は本当に夢みたいに感じているよ。まさか、……こんな平和が訪れるなんて」

拳が開かれ、彼の指が掌に絡まる。

腕の中で、振り向いた彼は、今にも溶けそうな表情で微笑んだ。

「離れることはない」

強く口にすれば、彼の表情は僅かに曇った。

それは、彼が望んでいることだった。

未だに彼自ら口にしていない事柄だとしても、長年戦場をともに駆け抜けた戦友として、愛し合う者として、理解できてしまう。

今もそうだった。彼の柔らかな黒髪に獣のように頬ずりをすれば、後頭部をくしゃくしゃと撫でられる。「君は甘えるのが上手になったな」と。無邪気に笑いながらも、内心では、今やるべき

ことではないだろうと呆れているのだろう。

彼の手首を掴んで、硝子扉へと押しつける。その瞳が、本心から驚いたのを確認してから、小さく開いた唇に噛みついた。

その唇は甘かった。まるで花の蜜を吸っているかのようだった。奪うことがこれほど甘美であるということを、教えてくれたのは彼が初めてだ。

「……っ、クラウス」

咎める彼の膝を撫で、そのまま上へと撫で上げていけば、彼の余裕はなくなっていく。戦闘から離れ、少し柔らかくなったように思えるその肉体の感触を楽しんでいけば、唾液で光る彼の唇が、再び男の名を呼んだ。

「クラウス」

その瞬間。

凄まじい破碎音がさざ波を掻き消した。

散らばる破片に、皮膚が裂かれる感触がした。

ほら見たことかと、ステイブンが背後で嘆息する気配がした。背中を合わせ、敵を察知する。仕方のないことだと、彼もわかっているはずだ。

この時間を、ただ邪魔されたくないだけなのだ。

「今日見た夢の内容、聞かせてくれよ」

ステイブンが素足の爪先でそつと木板をなぞる。途端、眼前に現れた敵が一瞬にして凍りつく。拳で破壊してしまえば、後に残るものは南国には心地の良い冷気だけだ。

彼の問いかけに、あの薄暗い光景が蘇る。
再構築され、異界と混ざり合った都市。

あの街こそが自分達の守るべき世界だった。

「君が、まだ人間だった頃の夢だ」

ヘルサレムズ・ロッド。

「なるほど」

見知った顔の牙狩りを殺して、彼は振り向く。

ステイブンは、その口元を血で汚しながら、満足そうに微笑
んでいた。

ぶわりと、全身の毛が逆立つのを感じた。

「ステイブン・A・スターフェイズ」

憐れなことに。

彼の美しい瞳には、目の前の男しか映っていないのだ。

「死にたくなったらいい給え。——その時は、私が君を密封する」

彼はもう、人間ではない。

ステイブンはその艶やかな琥珀色の瞳を丸く開いた後、少し
して、猫のように細めた。

「ありがとう」

どこまでも透明に澄んだ笑顔は、この運命を呪い、この生を終
わらせることを願っているかのようにも見えた。しかし、瞬きの
後、彼はいつもの彼の表情に戻っていた。そう見えたのはきつと、
彼ではなく、彼の前の男が、そうであれと願ってしまっているか
らなのだろう。

「さて、クラウス」

薄い氷をローブのように瘦躯に巻き付け、ステイブンは片手
を持ち上げた。

まるで、聖母の偶像のような美しさに、悪寒がした。

「今度は、どこに行こうか」

彼はもう、狂ってしまったているのかもしれない。

背に氷の翼を纏い、こちらに手を伸ばしてくる彼は、我が最愛
の友であり、我が最大の敵だった。

その手をとれば、恭しく口づけられる。

ふわりと身体が浮いた。

「君も大概狂ってるよ」

言葉に出していないというのに、彼はそんなことを口にして笑
った。

まるで少年のような、無邪気な笑みだと思った。

「さあ、いつもの逃避行だ」



A decorative, ornate frame with intricate scrollwork and floral patterns, rendered in a light gray color. It is centered on the page and contains the title text.

**Bitter?
or
Sugar?**





何だい？クラウス
脚で扉を閉めた事なら
両手が塞がってたんでね
許してくれよ

いや、彼の容態は
どうかと思って…



私が驚かせて
しまったせいだ…

熱が随分
高いの
だろう…？



君の牙は隠せない
獣のそれだ

妬けるね

心配しなくても
熱なら下がるさ

はい

すまない
助かっ

起きた時にまた君を見て
卒倒しないようギルベルトが
戻ったら少年を自宅に送って
あげると良い

ああ、そうしよう
君が来てくれて

おれならキスでも
ひとつもらおうか

人間なんか一溜りもない

ちゅっ

カッ



「助けてくれ！ ステーブン」

君の

だからきつと

俺くらいだろう

可愛いと思う
なんて物好きは

しまい切れない牙を



sweet junkie kiss

いちこ



人間に生まれついでの高潔などない。貧しくとも高潔な精神の者もいるし、金持ちでも卑屈な者もいる。

しかしながら、生まれついでの子の貴族という者が存在することをステイブン・A・スターフェイズは経験として知っている。教養があり知的かつ優雅、鍛えあげられた肉体は僅かな緩みもなくそれ自身が芸術品のようなものだ。そして何者にも屈しない強靱で高潔な精神。家柄的にも肉体的にも精神的にもいい意味で、彼程貴族的だという言葉が体現している人間はいないだろう。

そう秘密結社ライブラのリーダーであるクラウドス・ニ・ラインヘルツという男はまさに『生まれながらの貴族にして生粋の紳士』を体現しているような男なのである。

* * *

―さて、閑話休題。

『崩落』により異界と現世が交わる異形の都市、元紐育、現ヘルサレムズ・ロットの一角に居を置く秘密結社ライブラの事務所の前で、ステイブン・A・スターフェイズは目の前の光景をどうしたものかな、と思案しつつも長い脚をいささか行儀悪く組み替えた。

異様なことが起こることが日常のはずのここヘルサレム

ズ・ロッドで珍しくも平和で長閑な昼下がりではあるが、ステイ
ーブンにとっては(あくまでステイーブンにとっては)ある意
味世界の均衡を揺るがしかねない事件が現在進行形で起こっ
ているのであった。

「何難しい顔してるんすか？つか、それ早く喰わねえとバサバ
サで食べたもんじゃなくなると思うんすけど」

「あ、ああ。ちよつと考え事をしててな…せつかく買ってきて
もらったのに悪いな」

銀髪瘦躯の青年―ザップ・レンフロが怪訝そうにステイーブ
ンの前に置かれたサンドイッチを指差した。

丁度、時はランチタイムである。ライブラのザップを始めと
する若手組が昼食の買い出しに行くというのでついでに自分
達の分もお願いをしたのである。因みにステイーブンがお使
いを頼んだのは某ファーストフード店のサンドイッチで、ジャ
ンクフードはそろそろ身体にきつい歳になってきた身には野
菜を増量してカスタマイズ出来る点がありがたくて、よく利用
しているそれである。彼らがステイーブンのリクエストどおり
に買ってきてくれたそれは時間経過のせいで、ザップの指摘ど
おりやや野菜も萎びてパンも乾燥によりパサつきつつあった。
水分が飛んで飲み込みにくくなったそれをマグに入った冷
めたコーヒーで流し込む。はつきり言ってお世辞にも美味いと
はいえないが、時間の経ったファーストフードなんてそんなも
のだろう。

「ついでだからそれは別にいいんすけど…ああ、ひよつとして

旦那のことつか。前、みんなでダイアンスダイナーで飯くつ
てからすっかりジャンクフードにハマっちゃまったみたいっス
ね」

まあ、俺なんかジャンクフード食い過ぎっちゃまって飽き飽き
などこあるんすけど、旦那には物珍しいんじゃないっスかね。
ステイーブンに向かって肩を竦めてみせた。

ザップの方はもう既に食事を終えたのだろう、食後の一服と
ばかりにローテーブル上の灰皿を引き寄せ馴れた仕種で煙草
をふかし始めた。

ザップが煙らす紫煙越しに、ニコライブラのリーダーである
クラウス・V・ラインヘルツが律儀に食前の祈りを捧げた後に、
ジャンクフードの代表格であるハンバーガーにかぶりつく姿
があった。

並外れた巨躯のクラウスの手の中にあると、ジャック&ロケ
ッツの特大大サイズバーガーもやけに可愛らしく見える。バーガ
ーを包んでいるワックス紙を丁寧に剥がし、器用に中身がはみ
出さないようにかぶりついている。太い喉仏が上下し食物を嚥
下していく。供されているのはサイドメニューだったのだろう
フライドポテトに飲物はコーラとまさに定番と直球である。

(あーあ、嬉しそうな顔してまあ…そんな美味いもんじゃな
いだろうに)

誤解のないように云うとステイーブン自体は特別グルメな
わけではない。美味しいことにこしたことはないが、どこぞの気
取った美食家のように高級食材の蘊蓄をたれたいわけでも女

子のように洒落たカフェ飯を好むわけでもない。耐え難い程不味いわけではなく腹が膨れればまあ大丈夫というごく普通の男の味覚の範疇である。朝晩は家政婦のヴェデットがいるのでまともな家庭料理にありつけているが、昼は今日のようにファストフードの世話になることも多い。二十代だった頃はそれこそザップのようにほぼ酒煙草ジャンクフードで構成されていた日々だった。

しかしクラウスは違う。生粋の貴族である彼は生まれた時から銀の匙を持っているような存在だ。食事だってこんな大衆的なジャンクフードではなく、純白のテーブルクロスにナプキン、ピカピカに磨き上げられたシルバーのカトラリーで食事をするのが彼の日常だったはずである。

それが近頃はどうか。ダイアンスダイナーで（おそろくはじめて）ハンバーガーを口にして以来、クラウスの味覚はガラリと変わってしまったようだ。ハンバーガー、サンドイッチ、ホットドッグ、宅配ピザ、タコス、牛丼、ラーメンに回転寿司……こここのところのクラウスの昼食は見事なまでにいわゆるファストフードで埋め尽くされている。ヘルサレムズ・ロッド中のファストフードを制覇でもするつもりなのだろうか。

もちろんファストフードだって人気があり美味しい店もたくさんあるのは確かだが、美食に慣れたクラウスの舌を満足させるものだとはいえない。なんせ彼は美食の頂点に立つモルツオグアツアで平常心で食事を楽しめる男なのだ。到底、こんないわゆるB級グルメ的なもので満足出来るはずもない

ではないか。

（栄養的にも偏るしな……ギルベルトもどうして止めないんだ）

ザップの言うとおおり、はじめて口にするだろうジャンクフードが新鮮なのだろうが、こいつも毎日となると、あまりいい傾向ではない。

（こういう食事はあまりクラウスには似合わないと思うんだが……さて、いつまで続ける気なのやら）

要するにステイブンはクラウスの食生活が気に入らないのである。もつと語弊を恐れずに云うのなら、こういう食事はクラウスには相応しくないと思っているのである。なんせ彼は生粋の貴族にして紳士であるので。

我ながら、恋に溺れた小娘のような夢見がちなこだわりであるとは思いますが、逆に長い付き合いがステイブんに強固な固定観念を与えてしまっているのかもしれない。

しかし大して美味くもないだろうそれをどこか幸せそうに味わうクラウスを見ているとなかなか止めるとは言いにくい。

「なんかスターフェイズさん、旦那の過保護な母ちゃん……いや、違うか……心配性の嫁さんみたいっすね」

そんなジレンマを読み取ったのか、存外に鋭いところのあるザップが面白そうにニヤリと唇を歪めた。

「ザップっち。こんないつまでも初恋拗らせてるような男、気にしなくていいわよ」

「ちよっ……、いって、姐さん、腰がっ……」

どう返事をしたものかと一瞬躊躇している間に、スレンダー

な隻眼の金髪美女―KKがザップの首筋に腕を回して割り込んできた。思わぬ方向からぐいと首を引っ張られる不審な体勢に陥ってしまったザップが悲鳴を上げるが美女はまったく斟酌してやるつもりはないらしい。かくて、ゴキツと嫌な音共に哀れな青年の身体が床に沈んでいくが、ステイブンとしても今はそれを気にしてやる余裕がなかった。

まさに言いあぐねていた確信をずばりKKに突かれてしまい、ステイブンはへにやりと眉尻を下げた。しなやかで細い彼女の腕がザップから離れ、代わりに狙撃手らしく爪先まで念入りに手入れが行き届いた指先がずいっとステイブンの目前に突き付けられる。

「あんたって本当に面倒くさい男ね。どいつもこいつもこんな男のどろろいんだかさっぱりだけど……」

ちらりと隻眼がもくもくとファーストフードを頬張るクラウスへと向けられたのを見て、やはり彼女にはすべてお見通しなのだ和白旗を上げる。

「なあ、KK」

「なによ？」

「俺には到底あれがクラウスに相応しい食べ物だとは思えないんだが、どうしたらいいと思う？」

明らかに金ではない沈黙が漂う。特に有意義な答えを求めていたわけではないが、乱入してきたのはKKの方である。少しくらい協力してくれてもバチは当たらないに違いないとステイブンは緩く溜息を吐いた。

どうもこうも常々面倒くさい男だとは思ってはいたが、まさかここまでだったとは。

「俺には到底あれがクラウスに相応しい食べ物だとは思えないんだが、どうしたらいいと思う？」

どうしたもこうしたもない。しんつとした沈黙が二人の間に落ちる。暫しの空白の後に、すこぶる嫌そうな顔をしてみせたKKがローテーブルに置いてあったステイブンの飲みさしの冷めたコーヒを不味そうに一気に飲みした後、徐に口を開く。

「……さあ？ そんなに気になるならお上品な専用のシルバーでもプレゼントしたら？」

あからさまに投げやりといった様子のKKの案だったが、意外にもステイブンの琴線を揺らしたらしい。

見るからに明るい表情になったステイブンがふわりと唇の端を引き上げた。それだけでどこか艶めいた感じがするのだから、まったく色男とは得な生き物である。今KKの足元で伸びている銀髪の青年も可愛い妹分であるチェインも、そして敬愛すべき上司であるクラウスもみんなこのたちの悪い男の被害者にしか思えない。

「そうか……それはいいかもしれないな。ありがとう、KK」
「……いえ、どういたしまして。っていうか、今ほどあんた

が手遅れって感じたことないわ、あたし」

辛うじて、盛大に舌打ちしてしまふところだったのを堪えたのを誰か褒めて欲しい、とKKはこころなしかズキズキしてきたこめかみを指先で抑えた。

そしておそろくそれに嬉々として付き合うのだろうクラウスにも小言のひとつやふたつ言つてやりたくなくなったとしても誰もKKを責めることはないだろう。

人の恋路に首を突っ込んでおろくなことになるのは、現世でも異界でも、そしてここヘルサレムズ・ロットでも変わらない出来ごとのようだ。

* * *

優雅なカトラリー捌きに完璧なマナー。まさに身体の内側から染みついていくような所作で食事を摂るクラウスの姿はどれだけ見てもまったく飽きることはない。

例え、それがハンバーガーと山盛りのフライドポテトという不健康極まりないジャンクフードだったとしても、だ。

KKの案にのったステイブンが贈ったカトラリーセットを優雅に操るその様はまるでフランス料理のフルコースを食べているかのようだ。

まあ、実際はテイクアウトしてきたハンバーガー諸々を皿に

盛り付けし直したただけなのであるが。

「そんなに美味いか、それ」

「ステイブン？」

思わずぼろっと洩らしてしまった言葉にクラウスの透명한エメラルドグリーン色の瞳が確かな熱量を持ってステイブンを捉えた。理知的なそれがやや意外そうに軽く睨られる。なんとなく見透かされたようで居心地が悪くなったステイブンはもうこの際だからと、予てからの疑問をストレートにぶつけてみることにした。

「あー、いや……不味くなくてもその手のファーストフードは味が濃くて単調だから、こう毎日だと飽きないか？」

「ふむ、そうだな。単純に今の君の質問に答えるのなら、その通りかもしれない」

皿に残っていた若干冷めかけて油でしなびた最後のポテトを口に運びながら、クラウスが頷いた。

「ならどんな心境の変化なんだい？」

「体験の共有とでも云うべきかな」

彼にしては珍しい雑な動作で食べ終えた皿を横にずらすと、クラウスはテーブルの向かい側で頬杖をついていたステイブンに顔を寄せた。

「ステイブン、君があんなに嬉しそうに顔をして食べているから、きつととても美味しいのだろうと思つて……」

「俺がかい？」

思いもよらない回答に疑問符が頭を巡る。

今はヴェデッドという家政婦が通いで来てくれているおかげで幾らかは改善されてはいるものの、褒められた食生活ではないは自覚している。クラウスの前でジャンクフードを口にする機会は幾度もあったのでその時に見られていたのかもしれない。

しかしながら、そのクラウスの言うところの『幸せそうな顔』というのにさっぱり心当たりがない。

「君はあまりいい顔をしていないだろうが、以前から気になつてはいたのだ。——直接のきっかけはこの間、皆で買い出しに行った帰りにダイナーに寄つただらう？」

「ああ、あのピビアン嬢の店か」

言われてみれば、確かにそんな記憶がある。買い出し帰りに空腹を訴える部下達のためにレオナルドの行きつけだというダイナーで食事をしたはずだ。そこでハンバーガーを食べるのは初めてだというクラウスがやや緊張気味に挑戦しているのを押揃いつつ見守つた思い出である。

「そこで君があまりに幸せそうに食べるものだから、どうしても試してみたいという気持ちを抑えられなくなつてしまつて……」

「……クラウス！ちよつとストップ！……なんかここままでいくと何かとつもぬく恥ずかしい展開になりそうであつと耐えられないような気がする……ロスタイムを要求したい」

その時のことはステイブンもよく憶えている。しかもマスターやピビアン嬢には申し訳ないが、憶えているのはそこで食

べた料理の味ではなく初めてのジャンクフードと格闘するクラウスの姿なのである。従つて、クラウスが言うとおおり、ステイブンが幸せそうな顔をしていたとするのなら、つまりはステイブンがクラウスを見てそういう顔になつていたということだ。

十代の恋する小娘ならともかく、どう考えてもとうに三十路を過ぎた男が晒すには恥ずかしすぎる醜態である。

慌ててクラウスの口を塞ごうと、休戦を申し出たがあつさりとその要求は退けられてしまう。

「私も君の食べているものを共有したい、と思つたのだ。——恋人として、君にあんな顔させるものを放つておけるわけがない」サラツと告げられた言葉は予想どおりのものであつたが、その破壊力は想像以上でステイブンはともすれば逃げ出したくなるほどの気恥ずかしさと戦うはめに陥つていた。クラウスは嘘を言わない。たつたこれだけのシンプルな真実が蔽下の恋人のまつすぐな愛情を余すところなく伝えてくれるものだ。

（あーあ、これだから、クラウスには敵わないんだよなあ……）
思えば遙か昔、出逢つた時のまだお互いが子供だった頃から一度だってステイブンはクラウスに勝つたことなんてないのだ。

燃えるような赤を纏つたクラウスの顔が更に近づいてくる。太い節が高い指先に顎を取られる。男らしい頑強な輪郭に比例した大きな唇がステイブンの薄いそれとそつと重なる。

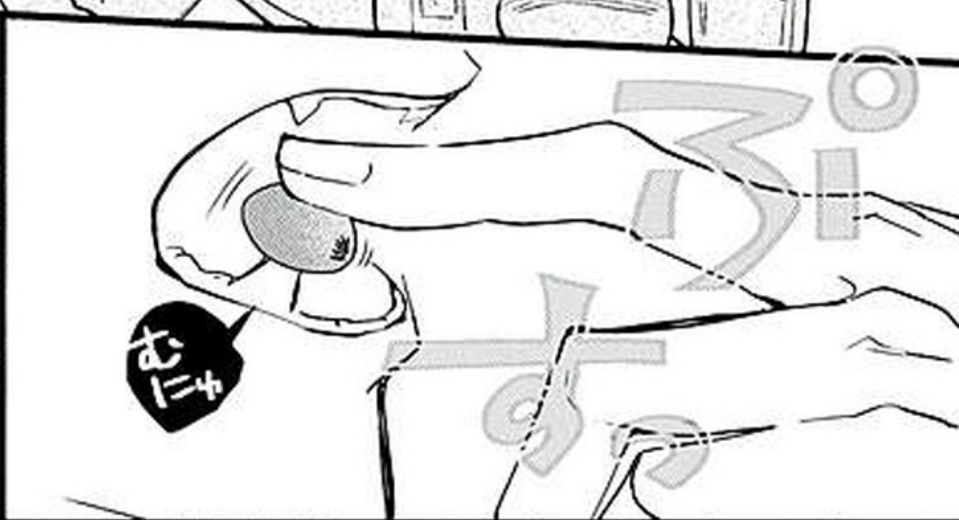
「それでその結果は？」

「少なくともキスの味は変わらないな。でもやっぱり君のそういう顔が見られるなら、まだこの生活を続けてもいいかもしれない」

しつとりとしたキスの後、ふと思いついてそう訊いてみたら、至極真面目な顔でそんなことを言う歳下の恋人にステイブンはもはや白旗をあげるしかない。

密かに主の身体によくない食生活を心配していたギルベルトには申し訳ないが、そんな可愛いことを言われてはステイブンも降参せざるを得ないではないか。もう一度降ってきた案外に柔らかい唇の感触にステイブンはそっと瞳を閉じた。

因みに、この様子をランチから帰還したKKをはじめとするライブラメンバーが生温い視線で見守っていたと二人に知れるのはこの五分後の話である。





チキ
ン



チキ
ン





**Bitter?
or
Sugar?**

oh my God! / ほえ

先日君が追っていた「義足の狩人」について有力な情報が入った

異界のある筋から入手したので

ああ、

キスしたいが

今すぐその唇に

まず間違いないだろう
やはり君が推測していた通りポオルツイオーネが絡んでいたようだ
複数の目撃者も出ている

今日中にも私と君で対処すれば騒ぎにはならずに解決することができようと思うっていたのだがその取引現場は

クラウス
クラウス
クラウス

どうかっ

キスが堪たか
堪らない！



神様っ
!!!!



END

A decorative, ornate frame with intricate scrollwork and floral patterns, rendered in a light gray color. It is centered on the page and contains the title text.

**Bitter?
or
Sugar?**



しあわせのあかり

アマネ



真紅のスポーツカーが真夜中のヘルサレムズ・ロットを滑るように走る。

時計の針が天辺を越したとはいえ、まだまだ週末が始まったばかりのこの街は、あちこちから光が溢れ、聞こえてこないだけで賑やかな笑い声や罵声怒声がそちこちにこだましているのだから。

己の車を危なげなく運転するステイブンは、現在会食からの帰り道にあった。会食と言っても楽しいお食事会でも交流会でもない。ライブラに多数資金提供してくれている、とある組織のお偉方に呼ばれ、激励という名のお小言を頂戴するという、頭も胃も痛い数時間であった。

まあ何だかんだ適当にお小言は右から左へスルーさせ、それなりに殊勝そうな態度で皮肉を躲し、案外と料理とワインを楽しんできた。引き続き資金援助は行うどころか、何ならその額を二割増しにさせたのはステイブンのせめてもの意趣返しだ。相手の渋る顔を拝むことができたのはステイブンにとっても、ライブラにとっても僥倖だろう。バックアップしてくれる資金提供者はいくら居ても困ることはない。

フロントガラス越し、ビルとビルの間から、一際高い、ステイブンが寝起きしているマンションの姿が見えてきた。

それなりにセキユリティがしっかりしており、且つ、ライブラという秘密結社のナンバー2という人物が住むのに相応しいマンションは、そもそも一フロアに二世帯しか入っていない高級マ

ンションだ。会ったことは一度もないが、住んでいるのは有名モデルやら大物俳優やら、ステイブーンと同じく(?)金を持て余した独身の会社経営者やらであるらしい。

ステイブーンの住まう部屋には、リビング・ダイニング・キッチンが各々二つずつあり、特にキッチンは有名店のシェフたちを呼んで調理してもらえぬ程度には広く、設備も整っている。ダイニングも、二十人からが一度に会食できるほどの広さを持っている。また、寝室に客間、書斎等々、他にも幾つもの部屋があるが、その何れも、こちらに来て三年余り、一度として使われることはなかった。

この部屋を決めたのは、箔付けしやすい分りやすいラグジュアリー感と、セキュリティの高さ、窓からの眺めだったため、使いたくない大量の空き部屋について、組織の立場とかそういうものを一旦置いたステイブーン個人の意見としては、ただただ無駄である。

車は良い。ステイブーンは自分で運転するのが苦ではない。寧ろ、飛行機やら地下鉄やら、己の意思で進むことができない乗り物の方がストレスである。この、日々思いもよらない様々な事件に遭遇するH1において、特注のイタリア車を購入し、自ら運転したいと考える程度には愛着がある。

一方、このH1におけるステイブーンの自宅等、精々眠りに帰るだけの箱である。金を無駄にかけるのすら些か虚しい。待つている家族が居るわけなし。そう、家族だ。

待つ者も居ない、ほんやりと空虚な自室——しかも無駄に広い

——に戻るのには、ほんの少しだけ、侘しさを感ずる。いつもではない。ふとしたときに、この思いが、水底からこぼりこぼりと湧き上がる泡のように顔を出すだけだ。

——あれ?

目測で己の部屋がある階を見つめると、どういふ訳か自室の明かりが点いていた。間違いなく朝自分は消していったし、家政婦であるヴェデットがもしかして消し忘れてしまったのだろうか。彼女にしては珍しい。

家政婦のヴェデットは異世界側の人間(?)だけれども、味覚はヒューマーと同じくしており、作る料理は絶品である。また温め直せば食べられる、魔法のような料理の数々を作り置きしてくれているだろう。

高層マンションの地下駐車場に車を停める。

それにしても今晚は疲れた。今更ながら襟元をくつろげる。話し合いがまとまった直後に簡単にクラウスには結果を報告してあるし、明日はゆつくりして良い筈だ。身体と脳みそをオフモードに切り替える。今日はもう、寝るだけだ。

ゆらりと運転席から降りると、すっと影が付き添ってきた。

「お疲れさまです、マスター」

「ああ。……お疲れ。お前たちも今日はもう休んでいいぞ」

「あの、そのことに関して報告が……」

「悪い、明日にしてくれ」

「ですが……」

「なんだ？急ぎの用なら——」

「いえ、そういう訳ではないのですが、ですが……」

「——おやすみ」

急ぎの用でないならば、明日改めて聞いても問題ない筈だ。それくらい判別は彼もつくだろうに、やけに今晚は食い下がらため半ば無理矢理話を切り上げてしまう。

「……は、おやすみなさいませ——」

珍しく歯切れ悪く食い下がったステイブンの私設部隊の彼らに、少しだけ疑問が過ぎつたが、本当に火急の事態であればもっと強く言ってくる筈だし、どちらかと言えば困惑が先に立っていたように思う。

エレベータの内と外、二段階の物理キーと生体認証システムでもってエレベータのロック解除をして、ステイブンの住まう階のボタンを押すと音もなく上昇を始める。重力に逆らう独特の感覚を僅かに感じながらその狭い箱に寄りかかり顔を閉じる。あと数分、数歩で、恋しいベッドに辿り着ける——。

心ゆくまで今晚は眠って、ヴェデットが作ってくれたランチを食べよう。今日は通いの日ではないけれど、作り置いてくれてあるローストビーフはまだある筈。近所の美味しいベーカリーのパンも確か残っていたし、それで美味しいローストビーフサンドを食べよう。そんな算段を付ける。

一瞬、誰か——恋人や伴侶とする者だ——がそんなありあわせだけでも素敵なランチを作ってくれたら等と考えるけれど、すぐに詮無いことだと思ひ直す。いや、淋しいのは事実か。帰宅し

た自分に待つ暗い部屋を想像すると怪しいと思う。そう、待つ者がいない部屋に帰るのは辛い。

そうして、今晚の商談に赴く直前のティータイムのやり取りを思い出した。

確か、ランチだのコーヒープレイクだのにしょっちゅう利用しているライブラ本拠地の近くの、カフェだかデリだかの女の子が結婚することになったと言っていたのだったか。それで結婚だのそういう話になったのだ。

専ら話をしていたのはザップ、ツェド、レオナルドの三人で、そこに交じるともなしに話を聞いていたのだが、レオナルドが時折、家族の待つ家が懐かしくなるとほろりと零した。それでうっかり、明かりの灯らない暗い部屋に戻るのには憂鬱だと、溜息混じりに話したら、ならば結婚されるのがよろしいのではないでしようかと、ギルベルトさんにこれ以上ない正論を吐かれてしまったのだ。

KKからの援護射撃もあり、ぐうの音も出ずに打ちのめされていたら、向かいでそのやりとりを聞いていたザップがまた爆笑していて、それが酷くイラっとした。——憶えてろよ！未だ笑いが収まらずニヤニヤしているヤツを見て、減給してやろうかとすら思う。

「え……、ステイブン、君、結婚を？」

「——は？えつと……そんな予定は今のところ全くないけど」
どうやらゲーム——恐らくプロスフェアに違いない——に集

中するあまり、会話の断片しか拾っていなかったであろうクラウスが、中途半端に会話に参戦してくるからややこしい。折角氣を遣ってステイーブンの気持ちに分かるとフオーしてきていた少年までもが困惑している。そんなことは一言も言っていないし、君の勘違いだと懸命に言い聞かせれば、分かったのかなんのか、クラウスは「もしそんなことになるのなら、スケジュールを開けなければ」等と呟くのみだから、またヒヤリとする。クラウスの口にした予定というものが、一体どういうものを指すのか、考えただけで色々頭が痛い。

そう、現在ステイーブンは結婚する予定は皆無ではあるが、決して恋人がいない訳ではない。目の前の、存在感のある巨魁の紳士、クラウスがその相手である。多分、クラウスも言うつもりはなかったのだろう。ある日ぼろりと口にした愛しているというその一言から、二人の関係は変わった。いや、恋人という関係が新たに増えたのだ。ついでに言い添えるならば、ステイーブンがクラウスに抱かれる側である。真摯に見据えるペリドットの瞳に絆され、どこで覚えてきたのだと驚く程の情熱的な口説き文句に動揺している間に、上下の関係は決していたのだ。それなりに浮名を流していた身としては一生ものの不覚だが、クラウスが喜ぶならばそれでいいかと思えてしまう自分も大概だと思っている。

結局あの場合は、独身貴族の気楽さと佻しさはトレードオフなのだ、その気楽さを取っているのだと精一杯の体面を取り繕って（繕いきれていないとは考えたくない）あの場を出て仕事に赴いたのだったか。はあ、と小さくため息を吐く。格好が付かないと

ころを晒してしまった。

部屋に着くとやはり明かりが点いていた。いや、照明だけでは暖かな風を感じた。エアコンも付け放しだったらしい。もしかしたら、消し忘れたのは自分なのかもしれないとステイーブンは考えた。ヴェデットは、雇用主である自分がつけ放しで出かけたから、現状維持をしていたのかもしれない。一瞬でも疑って悪かったと内心彼女に対して頭を下げる。

この日において、今更のように地球温暖化やらCO₂の排出抑制やらを唱えるのは無意味に感じるが、些かばつが悪い。

明確な違和感を感じ取り、ステイーブンはすぐさま警戒を強めた。疲労から困憊していた身体と脳みそが瞬時に覚醒する。何者かの気配。まさか敵か。

……なんかもう、全てがめんどくさい。全部まとめて凍ってしまえ、等と些か物騒かつ短絡的な思考になっていることは自覚できたが、私設部隊の彼らが警告していたのはこれのことだったのかと今更のように気付いて、内心舌打ちする。——というか！警告するくらいならお前たちが片付けろよ！それくらいできないとは言わせない。彼らの手にもし余るようならば、あんな中途半端な報告はしない。あいつら——！彼らを帰してしまったことを今更のように後悔しながらゆっくりとリビングルームの扉を開けた。

果たしてそこに居たのは、燃えるように真っ赤な髪をしたクラウスその人であった。

……えーと、これ、どうしよう。

散々、警戒心の塊のような状態で十数メートルを進んできたのが酷く馬鹿らしくなった。——ああ！確かにこれはあいつらも困るよな！そっだよな！俺にしか対応できないワケだ！ステイブンは内心一人ごちた。

彼らのボスたるステイブンの自宅に、ステイブンの元相棒・現上司であるクラウスが訪ねてきては、断るに断れない。というか、クラウスにその存在を明かしていない以上、表立ってどうこうすることは不可能だ。めちやくちや八つ当たりして悪かった——とひっそり詫言を入れながら、改めてクラウスに向き直った。

ソファのすぐ近くでしゃがみこみ、視線の高さを合わせ彼を覗き込む。

「うーん。良く寝てる……」

クラウスはステイブンの部屋のソファセットに腰掛け、近くに放置していたブランケット——ちなみにパーバリーだ——を申し訳程度に膝にかけて熟睡していた。それなりの大きさのカシミアブランケットなのだが、さすがにクラウスの巨軀には膝から腿、腹の辺りまでを覆うのみである。しかも少し身動きすればたちどころに取れてしまうだろう。

明日は、緊急の用件さえなければ出勤はなし、ということになっている。一応、ライブラにも就業規則のようなものはあり、当然休日というものは存在する。まあ年中どこかしらで何かしら起きてくるヘルサレムズロットにおいてそれが殆ど用を成していないだけなのである。

「そっか。来てくれた、のか……」

もしかしたら、昼間の話を聞いてくれたのかもしれない。クラウスなりに逃えたらしいリビングの様子を見て、ステイブンはくすりと笑った。

それにしても、だ。仮にも長年バディとしてコンビを組み、ここ数年は更にステディとしての関係も結んでいる無二の相手であるクラウスの気配に気付くことができなかったとは。彼には口が裂けても言えないなど、ひっそり反省する。

どうやら部屋は快適な室温に保たれ、照明も、シーリングライトは落とし、明るすぎない柔らかな間接照明を使っている。ステイブンの些か赤みがかった柔らかなブラウンアイには暗すぎる程だが、ステイブンが好むところの演出ではあった。

漂う香りは彼が買ってきた花だろうか。いや、クラウスが手ずから育てた花かもしれない。彼の温室ならば、まだ秋咲きのバラがぎりぎり花を咲かせているだろう。可愛らしい淡いオレンジから黄色のバラは、もしかしくともステイブンのよく身に付けているタイの色からだろうか。

ローテーブルには大きめのトレイが載せられ、そこにはティーカップと分厚いマグカップが用意されている。きつと、紅茶なり

コーヒーなりが準備されているのだろう。また同じくトレイには皿が載せられており、そこには、チョコレートやらクッキーやら、サンドウィッチといった摘める小菓子や軽食が小奇麗に盛り付けてある。ティーンのパジャマパーティーでもあるまいに。未だクラウスが目覚まさないようなので、答え合わせをしにキッチンへと足を向ける。ステイブンの自宅にはキッチンスペースは二か所あり、専ら使われているのはリビングの一角に面しているアイルランド型のキッチンスペースだ。時折自宅でパーティーをするため、こちらの方が使い勝手が良いのだ。

リビングのソファセットも良く見えるアイルランドキッチンには、温めればすぐに準備できるようにセットされたホットチョコレートやらコーヒー豆やら紅茶葉とティーポットやらがセッティングされている。ああ、そうか。会食で、酒も入るから、敢えてのこのチョイスなのだろう。いや、甘いものが多いのは間違いない。彼の好みでもあるのだろうか。

彼の気遣いを思つて、ステイブンは心がじんわりと温まった。きつと、暗い、明かりの点いていない部屋に帰るのは淋しいと、ちよつとした愚痴を溢した自分への、クラウスの思いやりだ。

クラウスだって、決して暇を持て余している訳ではない。彼にしか作りえない人脈を作り、そこから情報を得てくることだってあるし、組織の長として、様々なところからの圧力に対していかなければならない。補佐としてステイブンが居るが、彼にしか対応できないことも多い。そんな中、こうしてステイブンの自宅を訪ねてくれた。結局、サブライズミッションを完遂し得ない

ままうっかり寝こけてしまう程度には疲れているのに。それがひどく嬉しい。

一旦ベッドルームに足を向け、毛布を持つてくる。十分快適に保たれた室内だけれど、寝ているときは体温が下がっている。あつた方がいいだろう。そつと毛布をクラウスの体にかけて――さすがにこれはクラウスの全身をふんわりと包んでくれた――様子を窺う。ぴくりと指先が動いたけれど、起きる気配はなかった。肘掛に置いていたクラウスの手先が、ブランケットからはみ出している。ふと思つてブランケットを覆う前にそつと取り上げ、その甲に、節立った指に口付ける。

「……さすがにここまで目が覚めないのは珍しいなあ」
起きるかと思つたのだが、尚も眠っている様子のクラウスを置き、一先ず今晚の疲れを洗い流してしまおうと、ステイブンはシャワールームへと踵を返した。

*

感覚器官が何かを感じ取り、意識が覚醒した。香り、嗅覚だ。ミルクが温まる柔らかな香りと、苦みのある複雑で芳醇な香り、コーヒーをドリップしている香りだ。

はて、とクラウスは首を傾げ、先程とは感触の異なる己の全身を覆うブランケットを見やる。自室のものではない。と気付きました。と気が付きました。

「やあ、お目覚めかな、プリンセス？」

少し離れたキッチンスペースから、甘く柔らかな声が聞こえた。ステイブんだ。

「ステイブン！すまない！いつの間にか帰って——！」

「——悪い、今ちよつと手が離せなくてね」

良かったらこちらへ来てもらえると助かるとステイブンが口にしたので、クラウスは慌てて飛び起きて彼の元へ急ぐ。

キッチンスペースでちよまかと動き回る彼は、いつもの恰好ではなかった。帰宅し、既に着替えたらしく、ぱりつとハリのあつ、けれど彼のボディラインにうつくしく沿ったスーツ姿ではない。普段なかなかお目にかかることのできない、ゆつたりとした部屋着に身を包んだステイブンは、挽いたばかりのコーヒーにゆつくりと湯を落としながら、横目で茶葉の蒸らし時間を厳密に計っていた。

「ステイブン！これは……！」

「折角君が準備してくれていたみたいだったからちよつとね。よかったよ、ちよつと出来上がるところで目を覚ましてくれた」

大きな体を精一杯縮こませ、恐縮したようにあせあせと小汗を飛ばすクラウスを、硝子製のドリッパ―越しに見たステイブンはからからと笑っている。

「どうだい？サブライズは大成功だろうか？」

そう言いながらクラウスをいたずらっぽそうに見上げてくる彼は、日頃目にする彼のどの表情とも異なり、幼げで楽しそうだ。

クラウスとしては、苦虫を嘔み潰しながら只管恐縮する他なかった。今クラウスにできるのは、精々紅茶を淹れるのを代わってやるくらいだ。驚かせようと思ったのに、まんまと一杯食わされてしまった。

「チョコラテは明日にしようか。あと、ブランチでローストビーフのサンドウィッチを作るよ。ヴェデットのは美味しいから。楽しみにしているといい。ワインと良く合うんだ」

「ホットチョコレートは、ステイブン、君の飲みたいときに飲んでくれて構わない。……君の手作りなら楽しみだ。けれど悪いがそのサンドウィッチに合うのは間違いないビールだ。私のおすすめは——」

「はは。クラウスがようやく笑った。じゃあ相互のおすすめをそれぞれ買いに行こうか。負けた方が——」

「会計を待とう」

「いいだろう。スペイン産のワインを楽しみにしているといいよ」
ニツとクラウスの方を見て笑うステイブンは良い具合に肩の力が抜けている。普段顔を合わせるのが、事務所であったり、クラウスの自宅だったりなので、どうしても彼の自室のようにはいかないのだろう。こちらに事務所を構えてから、こういう風に仕事のこと関係なしに話をする機会がどうしても少なくなってしまう。互いに組織を背負う立場である以上、むつかしいのは分かっているのだが、それなりに長くバディとして組んでいいため、こういう気安い会話が懐かしい。

だから恋人（何と気恥ずかしくも嬉しい呼び名だろうか！）と

して、疲れた相手をひたすらに寛がせてやりたいと思つて、今回の計画を思いついた。

引越越しを手伝った際に渡されたものの、一度も使っていないかったステイブンの自室の鍵を初めて使つてみたのだが、この年上の、肩肘張つて生きている大事な恋人を甘やかすプランは、どうやら成功したとは言ひ難い結果となつてしまった。

時間を確認し、ミルクティにするつもりで少しだけ濃い目に淹れようと決める。茶葉の量は確認できていないが、ギルベルトまではいかなぬもののステイブンも紅茶を淹れるのは美味い。というか、クラウスの好みであるので恐らく問題ない。ちらりと砂時計の残り時間を確認し、ソファセットのテーブルに用意していたカップ類を持つてくる。

「よし、出来上がりだ。すまないが持つていくのを手伝ってもらえるかな、ハニー？」

「……む。了解だ、ダーリン！」

勝手に部屋に入ったこと、眠つてしまったことについてはきちんと謝ろう。けれど、それ以外のことについては、どうやらこの恋人がひどく楽しそうにしているのもういいかと気にしないことにしよう。彼の笑顔は自分の喜びだ。

「ステイブン、すまなかつた、その……」

クラウスはミルクティを、ステイブンはカフェオレのようだ。各々たつぷり注いだ大きなマグカップをカチリと小さく合わせ乾杯をする。表情を和らげ、リラククスしてマグを傾けるステ

イブンを見て、クラウスもほつと息を吐く。子どもじみたサブライズだが、それなりにアルコールを入れてくるであろう彼に、一息ついて欲しかったのだ。

「ああ、気にしないでくれ。寧ろ嬉しかったんだ。クラウス、ありがとう」

「今晚は何も起こらなそうだったし、いつも君が私のところを訪ねてくれるから……」

「たまには、と思つてくれた？嬉しいなあ」

「なのにつきり眠つてしまった」

「いいや？俺は嬉しいと思つたけど？」

普段ステイブンはクラウスがぐっすり眠つてるところ等なかなかお目にかかることができない。

クラウスは、その鋼のような強靱な肉体と相俟つて、精神の方も頗る強くしなやかだ。無論だからと言って顔や態度に全く出ないという訳ではない。勿論欠片も出さないようにすることも或いはできるかもしれないが、少なくともステイブンの前ではそうやって取り繕っている様子を見せないのは、ステイブンにとつて喜ばしいことだし、ライブラという組織の長として、彼のその実直且つ生真面目な性質を同胞に見せるには好ましいと思う。けれど、当然だが仕事場で転寝をするような状況に陥っている様子は見せない。(ザップじゃあるまいし！)

或いは、二人でベッドを共にするようになってからも、諸々の事情でステイブンの方が先に眠つてしまうことの方が多かった。これはステイブンとしては非常に釈然としないが、クラウ

スは所謂ショートスリーパー体質なのか、彼の方が先に目覚めて
いることの方が断然多いし、ステイブンの目を覚ませば気配で
彼もまた、目を覚ましてしまうことの方が多い。大体、ベッドで
眠る姿と、ああしてソファで転寝をしている姿は同じようであ
りながら全然異なるものだ。つい、気を緩めてしまったのだろう。
自室以外で。ステイブンの部屋で。

「ここは、君がリラックスできる場所なんだってことなんだろ
う？」

つまりはそういうことだ。恐らく片手で数える程しか訪れたこ
とがないであろう、ステイブンの部屋で、クラウドはまるで自
室のように寛ぐことができた。ステイブンに心から気を許して
くれている、ということの証左だろう。

「言い訳にもならないが。君の気配が、残り香がして……いや、
このプランケットからだろうか。君の匂いを感じて。……とても
安心する、良い、香りだったのだ。だから——」

「ああ！もう！言わなくてもいいよ！いつから君はライナスに
なったんだ？！」

「何を言うステイブン。私の名はクラウド——」

「——そういうことじゃないよ！もういいから！少し黙ってく
れないか！」

赤い顔を自覚しながらステイブンが左手を伸ばし、その手で
クラウドの大きな口を塞ぐ。

「ふていーふん、ふおのへをははひへふへふあひふあおうふあ」

「は？何て？！その手を離してくれないだろうか？……君が余
計なことを言わなかったら、あるいはね！」

「む……！ふああふあ」

ぬるり、ステイブンの掌に生温かなものが触れた。クラウド
の、舌だ。

やられた、と思つて慌てて手を引こうとするも、その手をクラ
ウスに取られてしまう。ぐつと腕を引き寄せられその腕の中に閉
じ込められてしまえば、体格的に大いに不利なステイブンに残
された手段はほぼ無い。無骨な手がさりとステイブンの顎を
撫でるのは合図だ。薄っすらと唇を開いて彼の唇を受け入れる。

クラウドが、彼の下の犬歯が当たらないようそつと唇に触れて
くる。ステイブンの下唇を食み、湿らせるように唾液で潤して
ゆく。平均よりも大分背の高い己すら、すっぽりと抱き込める大
きな手、腕、体は温かく気持ちが良い。

熱くなつてしまえば寧ろ積極的に攻めてくるというのに、キス
の始まりは、クラウドはただただステイブンを傷付けぬよう
と慎重に、窺うように口付けてくるのがいつもだ。窺うようにゆ
っくり、慰めるようにひたひたと触れてくる彼の唇を、舌を、そ
の舌で以て迎え入れてやるのはステイブンの役割だ。

「——つ、む、ん……」

クラウドがステイブンの手の中のマグを取り上げ、近くのテ
ーブルに載せる。ガラスの天板がカツンと小さく鳴った。何より
も甘いステイブンの唇を、舌を、もつと堪能したいと思つて、
彼に乗り上げる。

ブラウンシュガーとミルクの味がするカフェオレが唇から、首筋からは洗い立てのシャンプルーやボディソープの香り、そして何より、ステイブ自身自身の香りが眼前に広がる。互いに大きなブランケットに包まれた身体は温かく、柔らかなコットンの部屋着一枚からはすぐ間にステイブの体温を感じられる。全てが跳ねられたようにクラウスにとって気持ちの良い存在であるステイブに触れたくて、その大きな手でもって彼の身体を辿ってゆく。

「——っ、あー……あつたか……ん、気持ち、いい……」

キスの合間にそんな風に溢すステイブが何だか可愛らしいと思つて、引き続き唇は合わせたまま、体温を分けるように背を撫ぜる。

「んんっ……あ——」

ごろりと体勢を入れ替え、毛布にくるまったまま、ステイブがクラウスの体に乗上げた。床暖房のフローリングに毛足の長い、手触りの良いラグは普段あまり床に直に寝転がる機会のないクラウスだけでも気持が良いと思うし、何より二人して包まれた暖かなブランケットと、腕の中には愛しい大事な恋人が居る。暖炉もあれば完璧だろう。戦いの中に身を置く自分ではあるが、たまには、こんなささやかな幸せがあつてもよいのではないだろうか等と己の思考に浸っていたら、何やら規則的な呼吸が聞こえてきた。

そつと下から覗きこむと、ステイブは目を閉じ、ひそやかな寝息をたてていた。

そつと揺らしてみても、背を叩いてみても。耳元でその名を呼んでみても。起きる気配はなかった。これは狸寝入りではないだろう。——やれやれ。これで自分のミスは帳消しになるだろうか。

恋人が腕の中で寛いでくれるのは喜びだけれども。安寧だけを齎す存在だと思われのは些か困る。とはいえ。十二月に入ってから、何やかんやと。パーティーだの何だのに代表として顔を出してくれているステイブを休ませてやりたいのもまた事実だ。

そつと起こさぬよう、クラウスは体を起こし、腕の中のステイブを持ち上げた。くすりと小さく微笑んで、腕の中の彼を見下ろす。姫抱きなんて絶対にごめん！と言つて、普段は絶対にさせてくれない体勢なのは、ほんの小さな意趣返しだ。恐らくベッドルームだろう部屋を開けてみれば、果たしてそうであった。そつとベッドの上を下ろし、布団を掛ける。自分もまた、タイとウエストコートを脱いで隣に潜り込んだ。

眼鏡を外し、そう言えば、と先程話していたことを思い出す。「ステイブがもし起きなかつたなら、ビールとワインの勝負は私の不戦勝ということの良いのだろうか……」

そう小さく一人ごち、目を閉じる。温かな恋人の体を引き寄せ、自分も眠ることにする。朝の明るい陽射しにさらされた、少しだけ悔しそうな、けれど楽しそうな表情をした恋人の顔を想像する。明日は、何がなんでも、ステイブよりも早く起きなくては。







Blood Blockade Battlefield
Unofficial Fanbook



Matsuji
Yokomiya
&
Special Guest